



オゾネ百年記念誌

はじめに

株式会社オゾネは、おかげさまで前身である本小曽根合資会社が創立された1921年から数え法人設立100周年を迎えます。

本誌は法人設立100周年を記念しまして、その沿革を編述いたしました。ご高覧いただき、弊社への一層のご理解を賜れば幸いに存じます。本誌は小曽根家の家業について江戸時代初頭まで遡り、どのような経緯で今日に至ったのか、現存する資料を参考に事績を記しています。また、代々小曽根家が担ってきた社会的使命を明確にし、現在の事業状況とその展望を明示するよう編纂致しました。文字資料や写真を振り返り、先達の功績から学ぶことで今後の事業活動の一助となるよう念じております。

できるだけ実記に努めましたが、記録や資料の散逸があり、完璧を期すに至らなかったことは編者の力不足であり深く遺憾とするところであります。切に大方の寛恕を乞うと共に、併せて高教を仰げましたら幸甚です。

また、本誌編纂に際し、社内外各位より寄せられたるご援助に対し、茲に謹んで深厚なる謝意を表します。

少子高齢化社会の進展やコロナ禍によって、事業環境はきわめて厳しい状況となっておりますが、2世紀目の更なる躍進を果たし、皆様のご期待に添えますよう、一層努力してまいりますので、皆様におかれましては変わらぬご支援、ご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

ご挨拶

株式会社オゾネの前身である本小曽根合資会社が、大正10年（1921年）に設立されてから100周年を迎えることを記念して小誌を上梓するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

まずは、弊社のために長きにわたりご支援、ご尽力いただいた役員・従業員はじめ

取引先や地域の皆様に御礼申し上げます。

100年の節目にたち、こうして事業を継続してこられたのも、災害や社会情勢の変化に対応し乗り越えてこられた先人たちの努力の賜と感謝するとともに、その努力の結晶を引き継いだ責任を痛感しております。

資産管理という成り立ちから、弊社は常に堅実経営を実践しておりますが、

時代の流れのめまぐるしい変化に対して

柔軟に顧客視点と先見性を持って適切に順応していかなければなりません。

社員一同、常に顧客視点と先見性をもって挑戦し続けたいと存じます。

そして、これまで神戸とともに育んで参りました伝統・歴史・実績といったものをもとにして、これからも長期的な視野をもって地域とともに発展できるよう、微力ながら貢献して参ります。

今後とも、より一層のご支援、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

代表取締役社長

小曽根 佳生



株式会社オゾネは 2021年に設立100周年を迎えます。

小曽根家に関する記録をたどると、1600年代まで遡ります。

延宝7年(1679年)には屋号を「讃岐屋」として兵庫で酒造業を営み、兵庫醸造三大名家に数えられていました。

1800年前後に屋号を「樽屋」として酒樽製造業を始め、江戸末期には貸家業と貸金業にも着手し蓄財に成功します。

これが現在の「株式会社オゾネ」へととなりました。

兵庫の地で様々な産業が興り始めると、小曽根家は土地の名士としてインフラ整備事業に多額の投資を行い、

町の社会的・経済的発展に尽力します。特に、湊川改修工事や電気鉄道の敷設、ガスの整備を進め、

さらに福祉事業や造船業にも着手し、小曽根の名は兵庫の素封家として郷里に知られ、

関西財閥の重鎮をもって目されました。設立発起に携わった企業は数多く、その代表格としては、

阪神電気鉄道(株)、日本毛織(株)、湊川改修(株)、社会福祉法人神戸光有会、

神戸海上運送火災保険(株) (現・あいおいニッセイ同和損害保険(株))、阪神内燃機工業(株)、

帝国水産(株) (現・日本水産(株))、神戸瓦斯(株) (現・大阪ガス(株))、

廣野ゴルフ倶楽部、(株)オリエンタルホテル等があります。

不動産及び有価証券の管理を主とする本小曽根合資会社(現・(株)オゾネ)を大正10年に設立させ、

投資先の成長発展さらには地域の公益の拡大を支えてきました。

C O N T E N T S

はじめに	…	01
社長挨拶	…	02
もくじ	…	04
序章	…	05
chapter 1 [明治]	小曽根喜一郎の時代	… 07
	OZONE COLUMN 1 ：湊川隧道	… 13
chapter 2 [大正～昭和]	小曽根貞松の時代	… 15
	OZONE COLUMN 2 ：須磨御殿、広野ゴルフ倶楽部	… 23
chapter 3 [昭和]	小曽根真造の時代	… 25
	OZONE COLUMN 3 ：神戸光有会	… 29
chapter 4 [大正～昭和]	本小曽根合資会社	… 31
chapter 5 [昭和～平成]	小曽根有の時代	… 33
chapter 6 [平成～令和]	小曽根佳生の時代	… 35
	OZONE COLUMN 4 ：伝説上のオゾネ	… 39
	topics ：小曽根の先祖は誰なのか	… 42
	歴史年表	… 45
	参考文献一覧	… 47

江戸時代から兵庫津で酒醸を営んだ
兵庫醸造三代名家の一つ

17世紀中期に小曾根一族は兵庫津にて屋号を「讃岐屋」、通称を「甚右衛門」と名乗り、酒醸を以って家業としていました。

江口良橋著の『神戸史談』によると、延宝7年(1679年)にはすでに多流井氏、榎井氏と並び兵庫醸造三大名家に数えられておりました。延宝7年度ハケ一造酒高は162石5斗と登載されており、時の当主である小曾根重次(?～1685年)は豪家として知られていたようです。

小曾根重次の石碑には曾根氏重次と彫られており、これは、其祖が甲斐武田家の家臣である曾根一族であり武田家滅亡後に兵庫津に移住してきたため、小の一字をあえて落彫させたという説があります。南北朝時代から戦国時代にかけて、応仁の乱や花隈城の戦い、慶長の大地震等の影響があり文献資料が乏しく、真偽は不明です。

ところが神戸から遠く離れた長崎の地で幕末に活躍した小曾根乾堂の系譜は、大曾根八幡太郎曾根加茂之次郎小曾根新羅三郎と言われており、これもまた武田勝頼の幕賓とされています。小曾根乾堂の家祖である平戸道喜(?～1641年)について乾堂居士伝に記されており、“戦国ノ形勢ニ感スル所有リテ断然民間ニ隠レ、筑前博多ニ来リ通商ヲ試ミ、直ニ肥前平戸ニ転シ、慶長末年長崎本博多町ニ移住ス。平戸ヲ以テ氏ト為シ貿易ヲ業トス。”とあり、後年に小曾根姓に復姓しています。このように神戸と長崎の小曾根がどちらも武田家の家臣であったという伝説があり、これが偶然であるとも考えにくく、推測の域から出ないものの、支族が多い武田家家臣曾根一族が離散し各地にその一派が土着したと考えることも可能です。また、名声を高めるための創作であれば小曾根姓を名乗る必然性もない訳であります。

しかしながら確実なことは、寛文12年(1672年)に建てられた小曾根家の墓が真光寺に現存し、宿村八幡社(現・御崎八幡)の鍵預りの家であり、弁財天女社(現・永沢町厳島神社)の崇敬家であり延宝5年に石燈籠一基を奉獻していることが事実として残っております。また俳諧道も嗜み、重次の祖父である道慶(?～1679?)、重次の父である重命(?～1675)の句など多数が現在まで伝わっています。家祖が誰であれ小曾根一族が江戸時代初頭から神戸の地に根付き「讃岐屋」という屋号を掲げて家業を営んでいたことに相違なく、この流れが現在の「株式会社オゾネ」へと繋がっていくのです。

酒造業から酒樽製造業、
そして不動産賃貸業へ事業転換

小曾根重次の子・正吉(?～1715年)は宝永年間(1704～1711年)より兵庫津岡方名主役を十河長助、山口市郎右衛門とともに勤めています。正吉の子・重榮(?～1732年)、重榮の子・重基(?～1779年)、重基の子・隆恒(?～1798年)、隆恒の子・胤因(生没年不明)へと讃岐屋甚右衛門の名跡が襲名されます。

当時の兵庫津は、北風家一門による西廻り船の開拓により天下の台所大阪の外港として栄えていた一方、飢饉のたびに出される禁酒令や、酒造方法の変化により酒造の中心地が灘五郷へと移るなど「讃岐屋」にとって厳しい事業環境でした。そこで隆恒の子・宣孝(1774～1849年)は酒樽製造業を始め、屋号を「樽屋」とし、自らの通称を「喜一郎」(僖一郎)と改めました。船や樽の材料を取り扱う材木市ができるほど木材の需要が多くある兵庫津で、宣孝は成長著しい分野の事業を興したのです。

兵庫津から西宮にかけて、宣孝の他に「樽屋」を掲げている同業者がありますが、これは同一の屋号の下に共同・協力関係を結んで一個の経営体として活動するという当時の商文化によるもので、同じ屋号を掲げているからといって血縁関係があるとは限らないようです。

讃岐屋甚右衛門胤因には嫡嗣がなく、宣孝の孫・吉松を養子に迎えます。吉松にも嫡嗣がなく、小曾根本家筋は宣孝の長男である宣豊の孫の貞松が引き継いでいます。宣孝の長女・阿さは小柴家より婿養子を迎え、屋号を「樽屋吉兵衛(樽吉)」と掲げ、新たに店を構えます。宣孝の次男は小曾根喜七と名乗り、その末裔は現在も神戸で商売をされています。宣孝の三男は喜多甚七と名乗りました。

宣孝の長男である宣豊は二代目喜一郎(喜市郎)を名乗り、幕末の政治変動と経済界の混乱によって数多の豪商たちが没落していく中、酒樽製造業以外に貸金業や貸家業にも着手して蓄財に成功します。明治維新後は封建経済の崩壊につれて商業が行き詰まり、今後の見通しが立たないことから伝来の土地や居宅を投げ売りする者が多く現れましたが、儉約力行に努めていた二代目喜一郎はこの機に現金払いで土地家屋を広く買い受けました。この時に取得した不動産は、貿易港としての再興や市街地の延伸によって値上がりし、不動産の騰落によって財を築くことができたのです。この不動産投資による収益が三代目喜一郎や貞松らが積極的に行った産業資本への投資の原資となります。

花袋 雪や対つくる 窓の梅

小曾根 重命

梅の花 木影や老いのかゝれ笠

小曾根 道慶





左から、小曽根喜一郎、貞松、茂

■ 土地資本を軸とした堅実経営

兵庫城は天守閣をもたない平城であったため「お屋敷」と呼ばれ、明治維新まではここを中心に商業都市として海陸の物資が集散し、穀物、肥料、茶、煙草などの委託問屋や北風家や高田屋等の廻船問屋及び船持衆、船大工の業者が栄え、川崎新田から神戸村にかけては味噌、焼酎、醤油、酒造家が勃興していました。海辺に醸造蔵が棟を列ねる様を「酒家粉壁映晴波」と評され、夕日に反射する白亜の壁が波に映り、飛び交う白鷗の群れかと見間違えうばかり美しい風景だったようです。

小曽根家はこの兵庫城下町の奥ン城と言われる地区(湊八幡宮の裏手)に住み、道路を挟んで南北に相對峙した宏

壮とした土蔵作りの構えで、その周囲は昔ながらに梧桐の老樹を以てめぐらされ、付近一帯は借家を以て取り囲み、いわゆる地主として明治の時代を迎えました。二代目喜一郎は自宅がある兵庫の地を中心とした不動産投資や貸金業で手堅く経営を行っていました。

兵庫津は城下町として栄えてきましたが、黒船来航以降、諸外国から開港の要望を強く受け、兵庫津の東にある神戸村の海岸(海軍操練所があった辺り)に新たな港が建設されることになりました。こうして1868年に国際的な貿易港として神戸港が開港します。これにより外国商社が居留し、一旗上げようとした起業家が全国から流入し、生田川から神戸村の区域をはじめ上沢や下沢などにも新たな街ができていきました。このように街が変遷する中、明治10年(1877年)二

代目喜一郎は兵庫江川町の旧家である松本家から松本直太郎を婿養子として迎えます。

当時の神戸は新しい事業を起こしやすく、また発展させる機会にも恵まれていたため、資金需要が高く、小曽根家は貸金業者としての側面が色濃く出ている時代となりました。マッチや石鹼など新しい産業が次々に芽生えましたが、参入障壁が小さかったこともあり競合は多く、さらにはインチキ会社すら現れ、産業界は不安定で、融資するにもリスクが非常に高かったようです。この時、二代目喜一郎の婿養子、後の三代目喜一郎は堅実的で将来性のある事業を見極める目利き力を貸金業の経験から学びました。明治17年(1884年)に家督を継ぎ、三代目喜一郎が誕生します。二代目喜一郎は明治18年に亡くなり、三代目喜一郎が経営の舵を握ります。

■ 産業資本への投資を開始

三代目喜一郎はこれまでの経営方針を一変させます。酒樽製造業を廃し、貸家の売却や貸金の回収など資産の整理を進め資金化し、その多くを産業資本へ投資しました。

日清戦争(1894-1895年)後の神戸の街では、造船業、紡績業、銀行業、保険業、ガスや鉄道等インフラ事業など新たな産業が勃興しました。三代目喜一郎は貸金業の経験を活かして、社会的な公益をもたらす新しい産業分野の法人設立発起に携わり、積極的に投資を行います。1894年に摂津電気鉄道(現・阪神電気鉄道(株))設立に参画したのを端緒に、日本毛織(株)、湊川改修(株)、九州電気軌道(現・西日本鉄道)、帝国水産(株)、神戸海上運送火災保険(株)(現・あいおいニッセイ同和損害保険(株))、播磨船渠(株)(現・IHI)、東洋捕鯨(株)、(株)阪神鐵工所(現・阪神内燃機工業(株))など数多の企業の設立に携わりました。

さらに、日本羽二重(株)社長、(株)神戸米穀株式取引所理事長、日本酒造(株)、神戸生糸(株)、阪神土地信託(株)、日本蚕糸紡績、(株)天津取引所、京都火災保険



小曽根 喜一郎

(株)、大安生命保険(株)、長崎電気軌道(株)、兵庫電気軌道(株)、大日本石鹼(株)、(株)神戸商業銀行、富士身延鉄道(株)等の取締役もしくは監査役を歴任いたしました。

大規模事業を興すには多額の資金が必要なため、複数の財界人が共同出資して法人を設立させることが多くあり、三代目喜一郎もよくお声掛けをいただいたようですが、手あたり次第に関わった訳ではなく、社名から読み取れる通り、当時の成長産業に集中して投資していることが分かります。

この多角的な産業資本への投資は、財務基盤が土地資本であるという強みにより成し得たものと考えられます。神戸港が発展していくにつれ、産業の中心は兵庫から東の神戸へと移っていきましたが、二代目喜一郎は兵庫を中心に不動産投資をしていたのに対し、三代目喜一郎は湾岸施設と高級住宅のある神戸を主としてポートフォリオを組み替えており、不動産投資の戦略的中させ、小曽根家の財政状態をより盤石なものとしたと料します。現在の弊社本店所在地は、登記制度ができる前のこの時期には取得していました。

「性、勇断果決、あくまで一念を貫徹せざれば止まず」と当時の人物伝で評された三代目喜一郎ですが、自ら前面に立って事業を経営することを好まず、出資者として経営を監視していたことが特徴的です。多角的な事業投資を行っていますが、小曽根家の家

業である貸金業の業務の一つとして投資を行い、新興企業の財務面をバックアップしていたと言えます。つまり、設立発起に携わった企業は投資先にすぎず、社長になるため地位や名誉のために投資していた訳ではなかったと考えられます。ただ利潤だけを追い求めていた訳でもなく、湊川改修工事や電気鉄道の敷設などインフラ事業に加え、保険や銀行など金融業、造船業にも法人設立発起に関わる投資に参画していることから、社会および経済の発展を強く思い描いていたものと推察できます。

こうして小曽根の名は兵庫の素封家として郷党に知られ、関西財閥の重鎮を以て目されました。

阪神電鉄の立ち上げ

日本初の電車を走らせる

まだ電車というものがなかった時代、三代目喜一郎（以下、小曾根喜一郎と称します）は都市間を「広軌高速の電気鉄道で結ぶ」というコンセプトで神戸と大阪を結ぶ電車を走らせることを構想し、明治27年（1894年）3月阪神間の財界人らと共に摂津電気鉄道を設立発起します。後にこれが日本初の都市連絡電車「阪神電車」となります。

摂津電気鉄道の発起人には、辰馬喜十郎（辰馬南家、恵美酒銀行）、辰馬タキ（第11代辰馬吉左衛門婦人）、中島成教（第10代辰馬吉左衛門の三男）、小西新右衛門（小西酒造）、村野山人（神戸商業会議所の会頭）、鹿嶋秀麿（播但鉄道取締役）、神田兵右衛門（兵庫土着の豪商「岩間屋」）、濱田篤三郎（古美術商）、藤田松太郎（土木請負業）、直木政之介（日本燐寸製造（株）社長）、川崎正蔵（神戸川崎財閥の創設者）ら総勢30名の地元の名士が名を列ねました。その中から小曾根喜一郎は「摂津電気鉄道株式会社発起人惣代」の一人に選出されます。

明治29年（1896年）に摂津電気鉄道が阪神電気鉄道を事実上吸収した形で合併し、神戸から大阪間の電気鉄道敷設が大きく前進しました。合併後の社名は摂津電気鉄道を用いることになりました。摂津電気鉄道はその後、日本で初めて電気鉄道の実験運転に成功し、明治30年に軌道敷設特許を取得します。翌年に開催された創業総会において、小曾根喜一郎は取締役に出選され、初代社長には外山脩造が就任しました。明治32年（1899年）6月12日が設立免許日であり、この日を阪神電鉄の創立記念日と定められています。また、同年7月7日に臨時株主総会が開かれ、阪神電気鉄道に改称されました。

小曾根喜一郎は明治31年に取締役に選出されて以降、昭和2年には社長に就任するなど昭和7年に退任するまで34年間にわたり取締役の地位に就きました。退任してからは息子の小曾根貞松が役員を引き継いでいます。小曾根喜一郎は取締役であると同時に、安田、辰馬、川崎、松方らと共に大株主でありましたが、その後は増資のたびに持株が増えていき、大正5年から筆頭株主となりました。「名

望に於て殆んど大阪の鴻池と匹敵する」（東京毎日新聞社編、1918年、『大日本重役大観』341頁）と称され、また、「小曾根氏の勢力は今や阪神を動かすというが如き千鈞の重きをなすに至」（藤山獏郎、1925年、『大阪財閥論』162頁）といわれ、関西財界に対し確かな影響力を有していたと推測されます。

小曾根喜一郎は阪神電鉄の取締役を全うする傍ら、東京から九州まで電車を走らせる壮大な計画を実現すべく、川崎造船所社長の松方幸次郎と共に明治38年に九州電気軌道株式会社（現・西日本鉄道）の設立発起人として携わり、同社取締役役に就任します（松方幸次郎が社長就任）。小曾根喜一郎は昭和6年下期までの取締役に在任期間中、経営は順調に推移しました。さらに長崎電気軌道株式会社にも役員として入り、九州における電車事業を大きく発展させました。長崎電気軌道株式会社は社名変更なく2020年現在まで存続しています。九州電気軌道株式会社および長崎電気軌道株式会社の役員退任後は、九州の地元資本が主導する企業にすべく、地元有力者に事業を託しました。

神戸から大阪まで電車が走る路線が構築されると、神戸から西の方面へと延線する計画が立案されます。それを受けて明治40年（1907年）に川西、瀧川、川崎、小曾根喜一郎ら神戸の資産家の共同出資により兵庫電気軌道株式会社（現・山陽電気鉄道株式会社）が設立されます。敷設される神戸から明石間の新しい路線は、神戸から西へ向かう初の電車となりました。社長には川西清兵衛が就任し、小曾根喜一郎は監査役に就きました。また、経営リスクを分散させるため、明石から姫路までの路線を経営する神戸姫路電気鉄道株式会社が設立されます。昭和2年（1927年）に神戸から姫路の区間を一つの会社で経営するために宇治川電機株式会社（現・関西電力株式会社）が兵庫電気軌道株式会社と神戸姫路電気鉄道株式会社を買収し、今の山陽電気鉄道株式会社へととなりました。

さらに明治45年には富士身延鉄道株式会社（現・東海旅客鉄道身延線）の設立に甲州財閥の小野金六と共に携わりました。設立から昭和11年後期まで監査役に就任し、退任後は地元有力者に事業を託しています。

こうして小曾根喜一郎は都市連絡電車の基礎を作り上げました。

造船業に参入

帝国水産を創業

各地で鉄道事業の立ち上げを成功させた後、小曾根喜一郎は漁業企業の成長性に着目し、明治40年（1907年）から捕鯨業と造船業に着手します。

明治時代後期に漁業や造船業が発展した背景には、政府が遠洋漁業を推奨したことが要因の一つに挙げられます。当時の日本は生業的な沿岸漁業が主流であったため、北洋漁場をはじめ日本近海には外国船が水産資源を獲りにきており、それに対抗する必要がありました。明治32年（1899年）に日本遠洋漁業株式会社が日本で初めてノルウェー式捕鯨を成功させたことを発端に汽船捕鯨がはじまります。明治38年に遠洋漁業奨励法が改正され、さらに日露戦争により帝政ロシアの捕鯨が壊滅すると、日本は朝鮮近海から太平洋沿岸の金華山までを漁場として開拓することに成功し、明治41年時点において日本全国各地で12社の捕鯨会社が乱立する事態となりました。

こうして大型船を使用した近代的な漁業企業が勃興する中、小曾根喜一郎は瀧川辯三（マッチ製造会社清燧社）、弘世助三郎（日本生命三代目社長）、松方幸次郎（川崎造船所社長）、岸本豊太郎（岸本銀行創設者）、伊丹弥太郎（佐賀の財閥）、曾根忠兵衛（曾根忠兵衛商店店主）等、神戸財界の有志らと明治40年（1907年）に帝国水産株式会社を設立させ、ノルウェーで建造した捕鯨汽船2隻と国産の捕鯨汽船2隻の計4隻（アヴァロン号、諏訪丸、旭丸、六甲丸）を購入し、捕鯨業をはじめました。本社を神戸市下山手通6丁目におき、小曾根喜一郎は自ら取締役会長に就任します。

神戸市統計書によると、明治39年の神戸市の遠洋漁業における漁獲高は0.3万円（沿岸漁業は7.4万円）だったのに対し、帝国水産は明治41年に捕鯨業において19万821円の漁獲高をあげ、神戸市における遠洋漁業漁獲高は21.1万円となりました。2～3期には6%を配当するなど創業期は好調だった模様です。

しかし、乱獲による漁場の混乱によってクジラの保護と企業経営の安定が不安視されるようになると、明治42年（1909年）業界の再編が起こります。帝国水産の捕鯨事業は東洋



『海軍大演習観艦式写真帖』1903年頃、小曾根貞松が撮影

漁業、長崎捕鯨、大日本捕鯨と合併し、東洋捕鯨株式会社が設立されました。社長には東洋漁業創業者であり日本捕鯨の父と呼ばれる岡十郎が就任し、小曾根喜一郎は設立から昭和5年（1930年）まで取締役に就きます。その後、東洋捕鯨株式会社は昭和9年（1934年）にニッスイの通称で親しまれている日本水産株式会社に合併され、現在に至ります。

播磨船渠の建設

貿易業や水産業の振興の要は大型汽船であると睨んだ小曾根喜一郎は、造船業にも乗り出します。日露戦争後は益々大型船が増えることが見込まれ、大型船専用の新造および修理ドックが必要となりました。そこで小曾根喜一郎は相生村の村長である唐端清太郎の呼びかけに応じて明治39年相生村に船渠の建設を着手します。明治40年（1907年）に播磨船渠株式会社を設立し、小曾根喜一郎の息子である小曾根貞松が社長となり、専務取締役に唐端清太郎が就任します。取締役に岡崎藤吉らが名を列ねます。

樋上権兵衛著『郷土産業史 会社の歩みと巨人の足跡』（株式時報社発行、1957年、220頁）によると、播磨船渠の建設にあたり、工場の守護神として、小曾根邸内に祭られていたとされる天白神社の分霊を勧請して祠堂を造ったと記されています。今も赤レンガ倉庫の近く、ドックから見て鬼門の地に天白神社があることが分かります。これは、工場内に白狐が出没し、永くこのあたりに住んでいる老狐だから、工場の守護として祭らねば、どんな祟りがあるかもしれないという流言蜚語が伝えられたために造られたものでした。

しかし、船渠の建設は手掘りで進められていたこともあり、工事は難航します。ついに完成かと思われた明治42年（1909

年)に戸当口(渠口)が崩壊する事故が起きました。原因は基礎のコンクリートが弱かったためと言われ、完成直前に船渠の生命線である戸当口(渠口)が崩壊して海水が侵入してしまう大損害にもはや手の施しようがなく、小曽根喜一郎と貞松は事業を撤退することを決断します。播磨船渠株式会社は解散し、出資者や役員たちは大損失を被りました。

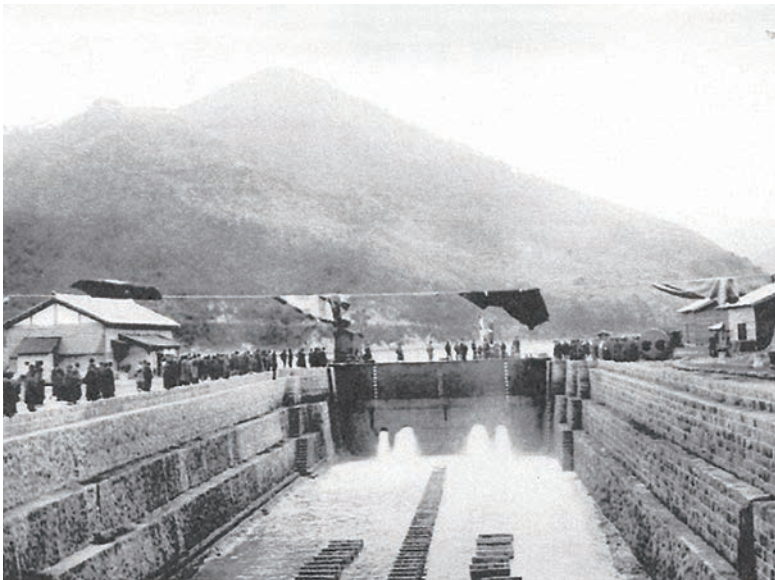
播磨船渠は後に、阪神間の資産家の力を借りながら再建工事が進められ、ついに明治45年(1912年)に能力6,000トンの修繕主体の船渠が完成します。岡崎汽船など神戸の汽船会社が利用するようになり、岡崎、辰馬、岸本などの海運資本が入り、明治45年(1912年)に播磨造船株式会社が設立されます。4年後の大正5年、鈴木商店大番頭金子直吉が適当な既存造船所の買収を考えているという噂を聞いた唐端清太郎はさっそく播磨船渠を売り込みに行き、その結果、播磨造船株式会社は鈴木商店に買収されました。鈴木商店の事業基盤が揺らぐと、神戸製鋼所による救済措置によって播磨造船所は存続します。昭和35年(1960年)に石川島重工業株式会社と合併し、1968年には石川島播磨重工業株式会社が株式会社呉造船所を吸収合併、平成19年(2007年)商号を株式会社IHIとして現在に至ります。

こうして小曽根家は多額の損失を被ったものの、播磨船渠は後に再建、拡張され存続し、日本有数の造船所となりました。天白神社は株式会社IHI相生事業所構内に現存しており、造化三神・工匠祖神・海上守護神が祭られています。第一次世界大戦後の日本は、船を持っていれば儲かると言われてたほどの海運ブームが沸き起こりますが、船成金が続出した頃には既に播磨船渠は欠かせない存在であったようです。

■ 神戸海上運送火災保険(株)の設立

日露戦争を経て船舶や貨物は激増し、商工業は飛躍的に発展していきます。付随的に金融業もさらなるサービスの展開が望まれ、小曽根喜一郎は神戸の資産家と共同出資して複数の金融業の事業を立ち上げます。

小曽根喜一郎は明治40年(1907年)に海上、運送、火災の各保険を取り扱う神戸海上運送火災保険(株)(現・あいおいニッセイ同和損害保険(株))の設立発起に参画します。岡崎真雄著『岡崎家の歴史』2014年、121頁による



播磨船渠合名会社「船渠」の様子(明治45年頃)(写真提供:鈴木商店記念館)

と、1900年初頭の神戸の企業は、外資の海上保険に加入することが多く、(当時の国内損保は東京が拠点で、地場の損害保険会社がなかったため)意思疎通の不便が生じた他、国内の資金が海外の保険会社に流れていく由々しき事態であったと指摘されています。

そこで地場の損害保険会社を創業すべく、損害保険に精通する岡崎藤吉を発起人代表として創立委員を立ち上げ、神戸の海運・造船業を営む資産家である伊藤長次郎(伊藤財閥)、辰馬吉左衛門(辰馬本家酒造(株))、『白鹿』、岸本兼太郎(岸本汽船社長)、辰馬半右衛門(東自慢醸造本舗)、森本六兵衛(森本倉庫創業者)、嘉納治郎右衛門(本嘉納商店、『菊正宗』)、八馬兼介(八馬汽船社長、西宮銀行頭取)、松方幸次郎(川崎造船所社長)、川崎芳太郎(神戸川崎銀行頭取)、若井源左衛門(若井本家、『牡丹正宗』)、沢野定七(済生信託社長)、米沢吉次郎(五十六銀行頭取)、片野喜介(辰馬汽船取締役)、小曽根喜一郎ら総勢15名が設立発起に携わります。神戸海上運送火災保険(株)の初代社長は岡崎藤吉が就任し、小曽根喜一郎は監査役に就きます。小曽根は大正11年には辰馬、岡崎に次ぐ第3位の株主となりました。

この他にも、小曽根喜一郎は京都火災保険(株)(現・AIG損害保険(株))の取締役を少なくとも昭和4年から8年の期間に勤めており、さらに大正3年(1922年)には大安生命保険(株)(現・プルデンシャル生命保険(株))の設立発起にも携わる等、保険業の発展にも尽力しました。

さらに小曽根喜一郎は大正13年(1924年)に川西清兵衛(川西財閥創業者)らとともに株式会社神戸商業銀行を立ち上げます(前身は(株)兵庫貯蓄銀行)。当時では銀行の設立は系列企業を発展させるのに欠かせない存在であり、神戸岡崎銀行(1917年設立)や神戸川崎銀行(1905年設立)、恵美酒銀行(1885年設立)など財閥形成の礎となった銀行が多くありました。株式会社神戸商業銀行は小曽根家が完全に支配する銀行ではなかったものの、小曽根喜一郎は、松方幸次郎、金子直吉(鈴木商店)、鹿島房次郎(神戸市議員、後の第4代神戸市長)らとともに取締役となり、岡崎藤吉と同率1位の株数を保有していました。しかし、恐慌により景気が悪化し、倒産する会社が続出した結果、預貸率が悪化した上に多数の不良債権が生じます。神戸を拠点とする岸本銀行は耐え切れず破産し、十万預金者を泣かせた(神戸又新日報1926年4月27日)と報道されました。そのような状況下でありながらも、多額の損失を覚悟で株式会社神戸商業銀行は渦中の岸本銀行の整理一切を引き受けました。これを遠因に昭和6年(1931年)株式会社神戸商業銀行は任意解散し、後継銀行は存在しません。

■ 喜一郎が最後に興した企業

播磨船渠から撤退した小曽根喜一郎は、帝国水産の業務部長であった山口誠一とともに船舶用エンジンを製造する会社を立ち上げます。当時の漁船の推進機関は蒸気機関かガス機関しかなく、それに代替する石油発動機を製造しようと試みたのです。

大正7年(1918年)株式会社阪神鐵工所(現・阪神内燃機工業株式会社)を設立させ、社長に息子の貞松が就任します。社章は小曽根の「小」をもじって菱形とし、中央左右に「H」と「S」をそれぞれ入れたものになりました。創業当初は従業員4〜5名でしたが、1955年には小曽根家の直営企業として初の大阪証券取引所に上場を成功させるなど、ディーゼルエンジンメーカーとして大きく成長していきます。

しかし、創業期は苦難の連続となりました。貞松が着任した2年後の大正9年(1920年)には戦後恐慌が、さらに大正12年(1923年)に関東大震災、昭和4年(1929年)に世界恐慌と立て続けに経済危機に見舞われます。日本経済

は大打撃を受け、船成金たちが没落していく中、貞松は難しい舵取りを求められることになります。

株式会社阪神鐵工所は小曽根喜一郎が設立発起に携わった最後の会社となりました。公職としては、神戸市会議員(明治22〜28年)、神戸市参事会員(明治34〜35年)、神戸商業会議所議員(明治24〜36年)まで勤めました。昭和2年(1927年)には阪神電気鉄道株式会社の取締役社長に周囲から推されるようにして就任します。神戸財界の長老として各方面との調整役を期待されていたようです。しかし、高齢のため昭和6〜7年頃には複数の企業の役員を辞しています。今まで携わった事業の多くを息子の小曽根貞松に引き継がせ、小曽根喜一郎は昭和12年(1937年)3月31日に死去します。83歳の大往生でした。

このように、小曽根喜一郎は神戸土着の名士として社会的・経済的な発展に尽力しました。地域社会の利便性を高めるため、私財を投じてインフラ整備事業や福祉事業に着手し、さらには多角的事業投資によって少なくとも25社の成長発展に貢献しています。

損失を被ることもありましたが、地元の名士として、事業活動を通じて社会的責任を全うしてきたことが読み取れます。鈴木商店、神戸製鋼所、神戸新聞社、高利貸しの家等が放火され、兵庫米穀取引所が破壊された大正7年(1918年)の米騒動を発端とする大暴動の際には、暴徒化する群衆から「小曽根家を守れ」と近隣住人が立ち上がりました。地域社会の人々の支えがあって、会社が守られてきたのです。

小曽根喜一郎が起こした企業は現在まで存続している企業が多くあります。その功績を称えられ、死後の昭和12年4月8日に従七位を受章しました。



小曽根喜一郎



歴史的価値の高い近代土木遺産として国の登録有形文化財に登録された、湊川隧道の内部

神戸明治期の三大土木事業、湊川改修工事

神戸港が開港されてから神戸村に外国人居留地が建設され、次第に神戸の地域が発展していきました。

それにしたがって旧湊川の問題点が浮き彫りになり、治水対策の必要に迫られました。これに対し、小曽根喜一郎は社会インフラの向上のため湊川改修工事の推進力となるべく邁進します。

さて、旧湊川の問題点は大きく3つあります。

1. 旧湊川からの流出土砂による神戸港埋没問題
2. 旧湊川の氾濫
3. 天井川である旧湊川が東西交通の障害となっている点

天井川である旧湊川は高さ6メートル以上にも達する堤防が築かれており、これが交通、経済活動などの面において神戸と兵庫を分断する障害となっていました。さらには1866、1874、1896年と度重なる氾濫が発生しており、六甲山から土砂が流入し続ければ神戸港の機能が低下

することが明白な状況でした。

明治元年から幾度も湊川改修について議論が起こり、北風正造や神田兵右衛門、小曽根喜一郎ら地元有力者が連名で政府に要望書を提出しましたが実現せず、ついに明治29年（1896年）の大水害で旧湊川の堤防が100メートルにわたり決

壊するなど甚大な被害に見舞われました。これを契機に治水事業がリスタートします。過去に何度も頓挫した改修工事の計画を修正し、地元住民の意見も反映され、会下山をトンネルで通す流路が採用されました。このトンネルが後に「湊川隧道」と呼ばれることになります。

この湊川付替工事は民間事業として行われ、小曽根喜一郎はじめ地元の有力者が資金を出し合い、当時日

本一の土木技術を持つとされた大倉組（現・大成建設（株））創業者の大倉喜八郎や、琵琶湖疎水工事を請け負いトンネル技術の実績がある藤田組（現・DOWAホールディングス（株））創業者の藤田伝三郎など多くの人々の力が結集され湊川改修株式会社が結成されました。水害の翌年（明治30年）10月に起工し、明治34年（1901年）8月に竣工することとなります。

こうして湊川改修株式会社により旧湊川は石井川と天王寺川の合流点下流の菊水橋付近から付け替えられ、会下山をくり抜いた「湊川隧道」を流れ、荻藻川に合流する新湊川が誕生し、旧湊川の河川堤防は削られて新開地と呼ばれる繁華街として発展しました。このように、小曽根喜一郎は幾度と頓挫してきた湊川改修工事を遂に実現させた立役者として名を残しています。



左から、小曾根貞松、露子、清、茂、喜一郎

川西清兵衛と繊維事業を興す

小曾根貞松は小曾根喜一郎（三代目喜一郎）の長男として明治12年（1879年）誕生しました。貞松の読みを誤って「さだまつ」と表記する資料がありましたが、正しくは「たけまつ」です。貞松は小曾根喜一郎による多角的事業投資の後を継ぎ、当時勃興してきた新たな産業の企業設立発起に参画し、また少なくとも40社に及ぶ企業役員を歴任しました。貞松の時代は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦乱と大恐慌や大水害、さらには労働争議、大企業の倒産や再編まで起こり、ひどく混迷を極めました。しかし貞松はこれを乗り切り、家運を繋いでゆきます。

小曾根貞松が初めて関わった企業は、相生村の唐端清太郎から勧誘を受けて設立発起に参画した播磨船渠株式会社でした。明治40年（1907年）同社の取締役社長に就任し、ドック建設費のために多額の資金を拠出します。しかし、この企業は明治42年に船渠のゲートが崩壊したのを契機に廃業し、多額の損失を出してしまいます。

次に貞松は、明治44年に山陽皮革株式会社（現・株式会社山陽）の設立発起に、繊維財閥と呼ばれた川西財閥



小曾根貞松

の川西清兵衛とともに携わりました。川西清兵衛は同社の取締役会長に就任し、小曾根貞松は取締役に就きます。これに参画した理由としては、川西清兵衛は卓越した手腕を発揮して多くの衣料繊維事業を立ち上げ成長させた実績があり、その代表格にはかつて小曾根喜一郎が設立発起の際に出資した日本毛織株式会社があったためと考えられます。

川西家はおもともと、兵庫津にある小曾根邸からほど近い場所で石炭問屋を営んでおりました。1887年に大阪の士族筑紫三郎助の五男が婿養子として川西家に入り、後に川西清兵衛を襲名してからは家業に縛られずに倉庫業や石油輸入など多角的に事業を拡大していき、明治29年（1896年）には毛糸事業として日本毛織株式会社を設立させます。小曾根喜一郎（三代目）は若き川西清兵衛の経営手腕を見込んで、この日本毛織株式会社に出資し、監査役に就任しました。また貞松は、昭和3年から昭和22年にかけて同社取締役に在任しています。創業当初は低品質と揶揄されていた日本毛織株式会社ですが、川西清兵衛のもと技術を飛躍的に高めて、現在では「ニッケ」という通称で親しまれる東証1部上場企業として繊維業界を牽引する企業へと成長発展を遂げました。

喜一郎にとって川西清兵衛は、同じ婿養子の立場でありながらも共に家業に縛られずに多角的事業展開を成功させた者同士であり、また年齢は川西清兵衛の方が9歳若いということもあり、喜一郎は川西清兵衛の活躍に一目置いていたと考えられます。実際に川西清兵衛と小曾根喜一郎は多くの企業の設立発起に共に参画しており、上記以外にも神戸生糸（株）、兵庫電気軌道（株）、（株）神戸商業銀行などがあります。貞松の時代に入ると、（株）伊丹製絨所、新興蚕糸（株）、神戸瓦斯（株）、オリエンタルホテルなど両家で設立や事業の発展に尽力しました。

中でも神戸生糸株式会社、株式会社伊丹製絨所、新興蚕糸（株）は川西財閥の系列企業であり、繊維財閥を形成する有力な企業でした。



川西清兵衛
(写真提供：日本毛織株式会社)

生糸問屋及び製造業として発展していく神戸生糸株式会社は、喜一郎、貞松、貞松の婿養子である真造の三代に渡り小曾根家から取締役を輩出します。後に上場を果たすも、景気後退による業界不振の影響から神戸生糸株式会社¹は2003年に民事再生法を適用します。

株式会社伊丹製絨所は高級毛糸及び絨地製造を目的として大正11年に兵庫県川辺郡伊丹町にて設立されました。小曾根貞松は設立当初から取締役に就任し、川西財閥に次ぐ株式を保有していました。同社は川西財閥主導で事業を拡大していき、昭和8年までに6工場が建設され、ドスキン、サージ、カシミアなど海外製品と比べても遜色のない品質で製造ができるようになりました。さらに事業を拡大すべく昭和10年から11年にかけて、伊丹製絨所の子会社として三重製絨所、篠山製絨所、桑名製絨所が設立され、貞松はその3社の取締役に就任しています。しかし太平洋戦争に入り、昭和16年5月15日に企業整備令²が施行され、軍需生産のため政府主導で多くの企業が整理・統合された際、同法に則り伊丹製絨所とその子会社含め4社すべてが東洋紡績株式会社（現・東洋紡株式会社）に買収されてしまいます。その際に貞松は役員を退きました。伊丹製絨所の跡地には現在イオンモール伊丹等が建っており、当時は猪名川沿いに大規模な工場群があったことがうかがえます。

小曾根家が出資した繊維事業は、その多くが川西財閥の系列企業であり、小曾根家は経営の実権を握らずに株主として取締役もしくは監査役の地位に就いて、事業の成長を支えていました。工場の新設や機械設備の投資には莫大な資金が必要であったため、小曾根家は出資によってその資金需要にできてきたのです。



伊丹製絨所全景（昭和8年8月）

1. 2003年民事再生法適用申請時の社名を表記しています。
2. 神戸市文書館 神戸歴史年表 (https://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/document/year/syouwa/syouwa_16.html) による。

第一ラミー紡績株式会社

1907年頃からリネンは国内で自給自足可能な繊維資源となったので、帝国製麻株式会社をはじめ多くの企業が勃興していき、リネン産業は国家規模の基幹産業へと成長していきました。本社を神戸市に置き、富山県上新川郡山室清水に工場を持つ第一ラミー紡績株式会社は第一次世界大戦による需要拡大に応じて大正6年(1917年)に創設され、小曾根貞松は設立に係る出資を行い、創業メンバーとして取締役に就任します。

富山工場据付の機械は木村宗吉技師長の発明に係るものとされ、製品は木村式ラミー紡績と称して七種類の特許権を有し、強靱にして鮮麗なるは全国比類なしと激賞されたと新愛知新聞1919年8月26日～28日の記事に記載されています。第一ラミー紡績株式会社は後に合併を繰り返し、現在は東証1部上場の帝国繊維株式会社となっています。

済生信託株式会社

小曾根喜一郎(三代目)が株式会社神戸米穀株式取引所の理事長を務めていた縁なのか、米穀商の沢野定七とは共同出資をすることが多くあり、日本羽二重(株)、京都火災保険(株)、(株)日本商業銀行、神戸海上運送火災保険(株)、山陽皮革(株)、(株)神戸電機製作所など共に携わりました。沢野定七は明治8年(1875年)生まれで貞松より4歳年上です。

大正2年(1913年)済生信託株式会社が設立され、社長に沢野定七が就き、小曾根貞松は取締役役に就任しました。済生信託株式会社は昭和2年に他の4社と合併して兵庫大同信託株式会社となり、信託業務以外の部門は神戸弘業株式会社と姿を変えましたが、引き続き沢野定七が筆頭株主で、小曾根家は第2位の株主でした。



廣野ゴルフ倶楽部ハウス前にて 左から、鈴木氏、東久邇氏、貞松

株式会社神戸電機製作所

貞松は県立神戸商業学校時代の親友であった直木三郎と共に、蓄電池の製造・販売を目的として、大正6年(1917年)株式会社神戸電機製作所を設立させます。同社は小曾根家が重工業に直接関与した最初の会社であり、貞松が設立当初から社長に就任しました。専務には、貞松の学友であり、日本燐寸社長の直木政之介の子息である直木三郎が就き、常務には直木三郎の実弟である柴田楠三が就任します。

同社で開発された蓄電池は船舶にもたらす恩恵が大きいたくことが見込まれたため、同社設立時に複数の神戸の海運業者が出資しており、岡崎忠雄、岸本孝太郎が取締役に、乾鼎一(乾汽船の乾新兵衛の養子)が監査役に就任しました。小曾根貞松は筆頭株主として経営権を握り、創業赤字となった際の資金繰りもバックアップしました。

小曾根家は大正6年から昭和13年まで同社の経営を行い、軍需市場と東南アジアへの輸出で業績は好調に推移しました。その後、合併や分社を経て1969年に日本蓄電池製造と合併し新神戸電機株式会社となり1972年に東証一部上場を果たします。2012年に新神戸電機株式会社は日立化成株式会社の完全子会社化となり現在に至ります。



小曾根貞松と清

大正7年(1918年)、朝日海上保険株式会社の設立発起に小曾根貞松は神戸の海運業者らと携わります。設立当時は第一次世界大戦の影響により大戦景気が沸き起こり、船を持ってさえいれば儲かると言われた時代でありました。まさに海上運送保険の需要が非常に高かったと史料されます。このような時代背景から朝日海上保険株式会社は辰馬汽船、内田汽船、勝田汽船、岸本汽船ら神戸の海運業者が大株主として名を列ね、貞松は1,630株を保有する全体の22位の少数株主でした。朝日海上保険株式会社は、神戸の海運業者の意向が強く反映される、彼らの共同企業として事業が展開されていきました。

特に内田汽船、勝田汽船、山下汽船は「三大船成金」と呼ばれ、好景気を迎えた海運業者が全盛期となる中、小曾根喜一郎は自らが取締役会長となっている帝国水産株式会社が保有するトロール船を大正6年にイギリスに売却します。それに伴い帝国水産は解散しますが、それを原資に多角的事業投資を進めました。一方で岡崎財閥系の岡崎汽船も大正6年に船を売却して得られた利益を元手に神戸岡崎銀行を設立(大正6年)させます。この資産の組み替えが、神戸財界でのゆるぎない地位を確立することになります。

朝日海上保険株式会社が創業して間もない大正9年(1920年)に戦後恐慌となり、苦境に陥った海運業者は私財の売却を進めます。やがて神戸の海運業者は朝日海上保険株式会社の持株を減らしていくことになります。朝日海上保険株式会社は大正9年に社名変更を行い、朝日海上火災保険株式会社となりました。



1940年前後の船舶の写真(小曾根家所蔵)



前列左から3人目が小曾根貞松

大正11年から岡崎財閥が朝日海上火災保険株式会社の全20万株の35.35%に相当する70,700株を保有する筆頭株主となり、岡崎忠雄が筆頭取締役(昭和4年から社長)に就任したことで、同社は完全に岡崎財閥系の損害保険会社となりました。これと時を同じくして小曾根家も持株割合を全体の5%までに増やし、貞松は大正11年から昭和11年まで取締役役に就任します。海運ブームに沸き起こる中、船を売却した岡崎・小曾根両家の戦略は見事に的中したと言えます、それは朝日海上火災保険株式会社の持株割合の推移に象徴されるように見受けられます。

朝日海上火災保険株式会社は後に、太平洋戦争による戦時経済・金融統制の下に合併が進められます。岡崎財閥系の神戸海上火災保険(株)、横浜火災海上保険(株)、共同火災海上保険(株)と対等合併し、1944年に同和火災海上保険株式会社となりました。新会社の初代社長には岡崎忠雄の長男である岡崎真一が就任します。同和火災海上保険(株)は2001年にニッセイ同和損害保険株式会社となり、岡崎真一の長男である岡崎真雄が代表取締役会長に就き、退任後は名誉会長となりました。2010年、ニッセイ同和損害保険(株)はあいおい損害保険株式会社と合併し、今のあいおいニッセイ同和損害保険株式会社となっております。

株式会社オゾネは現在、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社と代理店契約を結んでおり、神戸海上運送火災保険株式会社や朝日海上火災保険株式会社の設立発起に携わった経緯に重きを置き、保険業を以って経済活動の一助となるべく活動をしております。



駐留軍に接客中のトーアホテルにて、オリエンタルホテルスタッフと将校らと記念撮影(小曾根家所蔵)

神戸オリエンタルホテル

オランダ人のG・ファン・デア・フリース(G.van der Vlies)によって開業された神戸オリエンタルホテルは日本最古級にして最高級の西洋式ホテルとして旧居留地79番地にて明治3年(1870年)頃に開業されました。しばらくはホテルの所有者が転々と移り、一時期はエドワード・ハズレット・ハンターも所有していましたが、大正15年(1926年)からは神戸財界の有志が共同出資して株式会社オリエンタルホテルを創立させ、地元神戸の人の手による経営が行われるようになりました。

株式会社オリエンタルホテルの初代社長には当時の神戸市長であった鹿島房次郎が就任し、二代目社長には川西清兵衛が就きます。小曾根貞松は法人創立当初から取締役现就任し、昭和15年(1940年)から昭和26年(1951年)まで三代目社長として戦時中と戦後の難局の舵を取ることとなります。

神戸オリエンタルホテルは、“日本の玄関口として、外客にはできる限りの誠意を以て奉仕し、笑って迎え、喜ばれて送る”という信念を持ち、素晴らしいサービスを提供してきました。

威容を誇ってきましたが、太平洋戦争末期の昭和20年6月5日に空襲によってホテルの大半が消失してしまいます。営業再開の見通しも立たず、従業員全員を解雇して全面的な休業状態となりました。

終戦後は従業員を呼び戻し、トアロードの北端に位置するトーアホテルを株式会社オリエンタルホテルが経営することになります。戦争末期に川崎病院の分院として利用されていたトーアホテルをホテルとして再開させようという川崎重工からの提案でした。しかし、進駐軍の駐留によってトーアホテルは忽ち進駐軍将校宿舎として接収されてしまいます。

貞松は進駐軍接収ホテル経営という非常に困難な経営を余儀なくされます。進駐軍将校等軍人ばかりに仕えるという慣れない仕事は、懸命な努力にもかかわらず絶えず軍側からコンプレイントが出て苦労が続きました。そこで貞松は軍と会社との中に立ってスムーズに運営ができるよう取り組みます。まず、神戸オリエンタルホテルの信念に立ち返り、サービスの向上に注力します。勤務時間内に英語のレッスンをを行い、英会話が出来るホテルマンを配置します。また、日本で「フランス料理の父」と称されるルイ・ベグ्यूの系譜を継ぐ料理

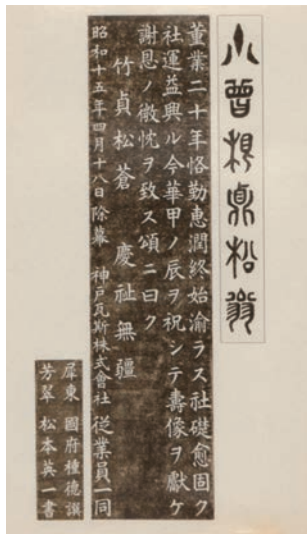
はレベルが高く、将校たちに非常に好評だったようです。さらに貞松の邸宅である『須磨御殿』に軍事政府高官やその職員たちを招待し、ガーデンパーティーを開催しました。花見や雛祭、クリスマスパーティーなどが開かれ、派遣されたホテルスタッフによるサービスは魔法のようだったと言われるほど盛況となりました。

やがて一般市民が利用できるホテルの必要性が高まった昭和24年に新たにホテルを建設し、名称を「ニューオリエンタルホテル」として再出発します。貞松は再興の道のり半ばであった昭和26年11月に他界し、四代目社長として川崎芳熊が就き、後に監査役として貞松の婿養子である真造が就任します。その後のオリエンタルホテルは、阪神淡路大震災で大きな被害を受け、取り壊されることとなり125年の歴史に幕を閉じました。

神戸瓦斯株式会社

神戸及びその近郊に燈火、燃料の便を供する目的として明治32年(1899年)に神戸瓦斯株式会社が創立されました。初代社長は杉山利介で当時の資本金は98千円でした。出張所の開設や葺合製造所の建設を経て、明治34年にガスの供給を開始します。明治39年には兵庫瓦斯株式会社を買収し、神戸市全域に対する供給権を確保し、二代目社長に瀧川辨三が就任します。三代目社長松方幸次郎の時代である大正9年には尼崎瓦斯株式会社に投資して経営権を得た結果、供給域は須磨から宝塚までの広域に広がりました。大正10年より小曾根貞松は神戸瓦斯(株)の取締役となり、昭和2年(1927年)から昭和20年(1945年)まで四代目社長となりました。

貞松の時代の神戸瓦斯(株)は飛躍的に成長を遂げます。創業当初は400戸(瓦斯販売高184千円)供給していましたが、昭和2年に70,000戸(瓦斯販売高33,186千円)、昭和14年には180,000戸(瓦斯販売高59,170千円)となり、昭和



神戸瓦斯本社ビル外観

4年からは資本金30,000千円、従業員700人超の大会社となります。この成長は、軍需産業の飛躍的な発展に伴い、軍需用瓦斯の供給量が増加したことも挙げられますが、一般家庭の需要戸数が伸びたことが大きな要因だと考えられます。

さらに、神戸煉染工業株式会社やベルベツト石鹼株式会社に投資し、経営の多角化を実現させていきます。瓦斯事業においても、当時の先端設備を導入し、ガス精製技術の合理化を図りました。

昭和12年(1937年)には、日本で著名な建築家である渡辺節が設計した本社ビルを新開地に建設します。竣工された当初の外観は装飾のない白い壁面を協調したモダニズムのデザインとなっており、近代都市と最新技術を象徴する先端的な建物となりました。内装はアール・デコ調のデザインとなり、幾何学模様や部分的な形式美が来訪者を楽しませました。神戸瓦斯本社ビルはその後、1980年に日本建築学会から発行される『日本近代建築総覧』に全国の重要な近代建築の一つとして掲載されるほど、文化的価値を帯びるものとなります。神戸瓦斯本社ビルは新開地のランドマークと言える存在でした。

1945年の終戦後、GHQの主導の事業再編によって、神戸瓦斯(株)は大阪瓦斯(株)に合併されます。貞松はこの時に大阪瓦斯(株)の取締役现就任しますが、阪神電気鉄道の社長業が多忙となり昭和22年に退任します。

渡辺節設計の神戸瓦斯本社ビルは大阪ガスの支店ビルとなります。阪神・淡路大震災での損壊を免れますが、2013年に大阪ガスの支店としての営業を終了し、その後、大和ハウス工業(株)の所有となり、新開地で親しまれていたこの歴史的建築は惜しまれながら解体されました。

■ 阪神電車

小曽根貞松は1946年に阪神電気鉄道株式会社の社長に就任します。阪神電鉄創業期から事業に携わり、当時は（株）住友本社に次ぐ第二位の株主であった小曽根家に前社長・今西与三郎の後任人事として白羽の矢が立ったのでした。社長就任前まで貞松は社外取締役でしたが、父・喜一郎も社長を務めた阪神電鉄を復興・復旧させるべく、（株）阪神鐵工所の経営を婿養子である真造に託し、全力で鉄道営業基盤の回復に注力します。

戦時中、十数回にも及ぶ空襲を受けた阪神電鉄は、大阪事務所が全焼した他、停留場、軌道、送電線に大きな被害があり、在籍車両286両のうち可動できる車両は55両という壊滅的状况でした。さらに労使問題も深刻であり、戦後における労働民主化の潮流の中、労働組合からの経営陣の退陣や企業民主化など尖鋭的な要求を受け、1946年の株主総会で今西社長と石井副社長、細野専務取締役が辞職しました。その後を託されたのが貞松です。

当時、直面していた経営課題は下記の通りです。

1. 輸送設備の復旧
2. 設備資金の調達
3. 甲子園球場の復旧
4. 労働組合との折衝
5. インフレ対策

山積する諸問題に対処するため役員会は毎日のように開かれ、小曽根貞松社長体制下で労働改革が実行されていきます。1946年に労働協約が締結され、1947年に私鉄総連が結成、同年には最低賃金制について合意し、戦後の労使関係の枠組みができあがりました。また、小曽根貞松社長体制以降、生え抜きの社員出身役員が過半数を占めるようになり、労使関係は改善され、経営陣による経営の主体性を取り戻すことができました。

次に、輸送設備復旧に係る資金調達のために増資・社債発行を行います。小曽根家も私財を投じて応援し、個人と法人の保有株式数を合わせると、1950年3月末時点で（株）大阪銀行、（株）三和銀行に次ぐ第三位の株主となりました。これにより鉄道輸送力が回復し、路線生産性が上昇していきます。また、インフレにより過小となった企業資産や運賃を見直し、財務の健全化に努めました。

甲子園球場は戦後しばらく進駐軍に接収されていました。1947年に接収解除となり、タイガース二代目オーナーとして小曽根貞松が就任します。ラッキーゾーンの設置や諸施設の復興が進められ、この年には春・夏の甲子園が復活し、プロ野球公式戦も甲子園で開催されるようになりました。本拠地に戻ったタイガースは同年、公式戦で優勝を果たします。1951年には総工費8,300万円の予算をかけて大銀傘が8年ぶりに復活しました。

貞松は須磨から梅田まで電車通勤をしていました。お客さまを立たせて自分が座るわけにはいかないと言い、席が空いても必ず扉付近に立って乗車していたようです。阪神電鉄の復興はかなり進みましたが、小曽根貞松は1950年に健康を害し、志半ばで社長を退き、相談役に就きます。後に小曽根真造が社外役員として阪神電鉄に入りますが、それは貞松の死後のことです。同社と小曽根家の関わりは年々薄れていきますが、貞松が成した最後の功績は色褪せることはありません。



電車にて、右から2人目が小曽根貞松



阪神電鉄役員の集合写真。前列右から3人目が小曽根真造



須磨御殿に要人を招待し、オリエンタルホテルスタッフらと共にもてなした

須磨御殿

旧武庫離宮（現・須磨離宮公園）の南方には、「須磨御殿」と呼ばれた小曾根貞松の邸宅がありました。「須磨御殿」は書院造の本館（大書院）、唐門大玄関、茶室、洋館等があり、主に迎賓館として利用され、高松宮殿下夫妻や久邇宮朝融王ら皇族も貞松は迎え入れています。

明治43年（1910年）に兵庫電気軌道（株）（現・山陽電気鉄道（株））が兵庫―須磨間の鉄道を開業させたことも後押し、須磨には阪神間の富豪たちの邸宅や別荘が数多く建設されました。大正時代に三大船成金の一人として数えられた内田信也もこの地に居を構え、改修や増築を重ねた邸宅は大正10年頃には「須磨御殿」と呼ばれるようになります。大正9年頃から始まった戦後恐慌によって海運業は大打撃を受け、負債の圧縮を試みた内田信也は「須磨御殿」の売却を決意し、売却先として小曾根貞松に白羽の矢を立てます。これを受け大正11年（1922年）に本小曾根合資会社が当時の金額にして百万円で「須磨御殿」を購入し、貞松の邸宅兼迎賓館として小曾根家の所有へと移りました。

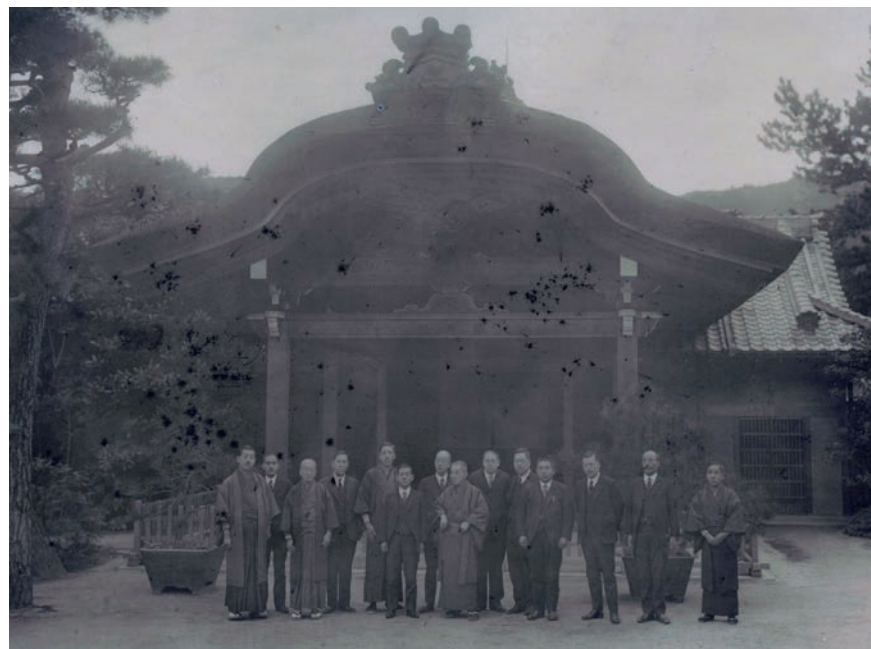
「須磨御殿」は賓客をもてなすことを前提とした設計で、小曾根家の所有に移ってからまたたび饗宴が開催されま

した。邸宅は離宮道の通るなだらかな斜面にあり、五千坪余りの広大な敷地の中には大庭園もありました。そこには築山があり、池があり、大小さまざまな燈籠が30数基もすわっていました。中でも高さ6メートル、笠石に畳8枚を敷けるほどの破格の大きさを誇った「雪見灯籠」が来客者を圧倒させました。

第二次世界大戦後は敷地内の洋館が米軍に接収され、補給担当の米陸軍高級将校であるクリアウォーター大佐の家族が居住することになります。財閥解体や資産没収が進められていきますが、貞松の孫娘が英国生まれでイギリス国籍を有していたために、「須磨御殿」すべての接収は免れました。

神戸オリエンタルホテルの社長を務めていた小曾根貞松は、ホテル主催で「須磨御殿」にて花見を主体としたガーデンパーティーを開催するにあたり、ホテルに宿泊している米軍将校たちや軍事政府高官たちを招待しています。他にもダンスパーティーでは、進駐軍の人々が様々なレコードを持ち込み、ジャズも流されました。

貞松の死後、「須磨御殿」は小曾根家の迎賓館としての役目を終え、昭和28年に天理教兵神大教会に売却されます。当時の建物群は残念ながら現存せず、阪神淡路大震災によって大半が損なわれたようです。



唐門大玄関前にて、中央の和装の人物が小曾根喜一郎



大書院外観



雪見灯籠



ゴルフ場にて。前列左から2番目が小曾根真造

※ 広野ゴルフ倶楽部

日本を代表する名門コースとして名高い広野ゴルフ倶楽部は、神戸オリエンタルホテルでの午餐会に端を発します。三木の奥地にゴルフ場に適する土地があるから買ってほしいという話が持ち込まれ、後に川崎造船所社長となる鑄谷正輔ら神戸財界の重鎮4名が実地検分しに行ったことが開場へと繋がりました。丁度、どこか良い場所があれば新しいコースを造りたいと多くの財界人が願っており、舞子ゴルフ倶楽部の会員で熱心なゴルファーであった小曾根貞松もその一人でした。

実地検分をした結果、その売り込みにあった土地はゴルフ場に適するものではなく、鑄谷正輔らは落胆して帰路についたそうですが、その道中、広野新開あたりにゴルフコースにうってつけの土地を発見します。これが後の広野ゴルフ倶楽部のコースとなります。

この偶然に発見した広野新開の土地は旧三田城主である九鬼子爵の所有地であることがわかり、さっそく九鬼隆輝、鑄谷正輔、小曾根貞松らが松茸狩りという名目で現地を調査します。昭和6年には当時最も有名であったコルト・アリソン・アンド・モリソン設計事務所のゴルフコースアーキテクトであるアリソン氏に設計を依頼したところ、広野を実地したアリソン氏は3日間神戸オリエンタルホテルに籠もってレイアウトを設計し、後世に残る超一流のゴルフコースが起案されました。当時は不景気だったため、貞松ははじめ建設慎重派が複数人いましたが、アリソン氏の図案を見て財界人が

※現在は“廣野”と表記されますが、開場から少なくとも50年ほどは“広野”と表記されていました。時代背景を合わせるため、本文では“広野”と表記いたします。

皆、建設に乗り気になり、九鬼子爵も喜んで土地を提供するに至りました。

発起人は鑄谷正輔、九鬼隆輝、岡崎忠雄、松岡潤吉、乾新治、沢田清兵衛、川西清司、小寺敬一、高津奈良男、南郷三郎、室谷藤七、沢野定良、鈴木岩蔵、竹田龍太郎、石川茂兵衛、伊藤長蔵、高畑誠一、小曾根貞松の総勢18名となり、昭和7年（1932年）に広野ゴルフ倶楽部が発足します。代表取締役は鑄谷正輔、九鬼隆輝がプレジデント、キャプテンは高畑誠一、名誉書記に小曾根貞松、名誉会計として岡崎忠雄が着任します。

小曾根貞松は創立常務委員の一人として鑄谷正輔とともに資金面を工面していきます。工事費用は次第に増額していき、総費用が当時の金額にして55.6万円にも及びましたが、特に、松岡、乾、岡崎、小曾根が大口株主となり、まずまず後顧の憂いなきを図りました。

こうして昭和7年6月に開場された広野ゴルフ倶楽部は名門ゴルフ場としての地位を固めていきます。貞松も理事として発展に尽力し、昭和11年にはプレジデントに着任します。貞松の長女である小曾根路子は熱心にゴルフをし、日本女子選手権や東西対抗コンペなどに出場するまでになりました。

第二次世界大戦の際に荒廃したゴルフ場を再興すべく、鑄谷正輔ら役員全員が昭和22年に役職を総辞職し、新代表の乾豊彦に託します。貞松の婿養子である小曾根真造も昭和23年から監事となり、後に理事に就任し、引き続き運営を支えていきました。



左から、落子、有、真造、茂、喜一郎、貞松、淳子、清

Ⅰ (株)阪神鐵工所

小曽根真造は、明治36年(1903年)名古屋で豊表麻^{あさお}学商を営む榎並庄兵衛の四男として誕生しました。真造は大正15年に慶応大学高等部を第一期生として卒業し、2年ほど日本碍子に勤務します。後に小曽根家に婿養子として入ることが決まり、ハネムーンと海外視察を兼ねて二年半ほどロンドンを中心にヨーロッパ諸国を遊学しました。

真造の父である榎並庄兵衛は名古屋商業会議所議員としても活動し、さらには家業の他に熱田電気軌道株式会社等複数の企業にも関係を持ち、名古屋経済界に尽くした人物です。榎並庄兵衛の妻は、名古屋橘町油商「高麗屋」六代目吉田新三郎の四女ふゆであり、ふゆの妹である五女きよ(清

子)は小曽根貞松に嫁いでいます。貞松ときよとの間に生まれた小曽根落子(富貴子)は従兄弟関係に当たる真造と結婚したのです。また、真造の姉である綾子は銘酒白鷹を醸造する北辰馬家第三代当主の辰馬悦蔵に嫁ぎました。

「高麗屋」は慶長15年(1610年)高麗屋九兵衛が名古屋に移住したことに始まります。寛文10年(1670年)生まれの吉田新三郎が油問屋を営み、都市部での油需要が高まった18世紀以降に順調に業績を拡大させ文化6年(1809年)に



小曽根 真造

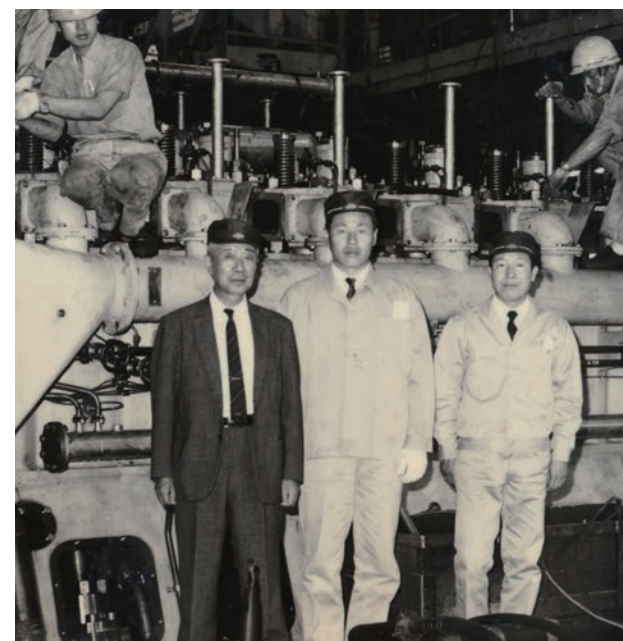
は油屋取締役に任じられ、尾張藩御用商人「十人衆」のひとりに数えられた豪商です。代々吉田新三郎を通称としており、明治維新後も油問屋を中核事業として商売をする傍ら雅楽愛好家として知られ、七代目当主の時には熱田神宮舞楽で演奏した記録が残っています。

名古屋商人の血を継ぐ小曽根真造は帰国後の昭和6年(1931年)、(株)阪神鐵工所に入社し倉庫係として勤め始めました。「一から出発」という覚悟だったと真造は回想しており、作業服を着て工員に混じって働く日々を送りました。経理も担当した後、昭和8年に常務に就任します。「親切第一主義」を社是に掲げる同社は、欧米で主流になりつつある推進機関の自社製造を目指しており、ヨーロッパ遊学中にディーゼル機関に関する知識を集めていた真造は、従来の焼玉エンジン製造に加え、ディーゼルエンジンの製造に着手します。

株式会社阪神鐵工所は大正7年(1918年)に資本金30万円で小曽根喜一郎によって設立され、長田区一番町三丁目一番地におおよそ一千坪の土地を用意し工場を構えていました。初代社長は喜一郎の息子の貞松が就き、専務取締役には山口誠一が就任し、専ら船舶用石油発動機の製造を目的として技術を磨いていました。当時の兵庫は川崎造船所や三菱造船所を筆頭に造船業が盛んであり、それまで主流であった船舶推進機関である蒸気機関に代替する技術として石油発動機が登場したことによって、新ビジネスが芽生えようとしていたのです。

内燃機関の特許や燃料油定圧機の実用新案権を持つ従業員を集め、さらには株式会社新潟鐵工所との提携による技術の向上や、小曽根家による追加出資によって工場拡張と設備投資がなされていき、陣容が整えられていきます。大正7年に山口誠一を代表取締役として設立させた巴鑄工所を大正9年に合併させ、鑄造工程から組立後の検査工程まで全工程を一貫して科学的に製造管理を行い、研究の推進と能率の改善に努める精品主義(良品主義)の文化が構築されました。こうして農商務省認定工場の金看板を掲げて、大正14年(1925年)船舶用の無水式ボリンダー型焼玉機関が販売されたのです。

小曽根真造は現場主義者であり、従業員の名前もほとんど覚えていました。自社技術の向上にも熱心であり、自社設計ディーゼル機関Z6K型を開発するなど、業界内でも異常と



阪神内燃機工業(株)工場内にて、小曽根真造と社員たち

まで賞された精品主義を徹底した結果、製品の信頼性が高まり、海外から受注があった他、軍からの注文も増えていきました。昭和12年(1937年)に小曽根喜一郎が大往生を遂げたのを機に、喜一郎と苦楽をともにした功労者・山口誠一が専務取締役に退任し、後任の専務取締役に小曽根真造が就任します。また、三井銀行神戸支店長の経歴を持つ松元勢蔵を取締役に迎え、新体制を以て大戦期に入っていきます。

昭和13年(1938年)に国家総動員法が公布され、阪神鐵工所は帝国海軍の管理下に置かれることとなり、海軍秘密工場として軍需工場に指定されました。ドイツから潜水艦で運んだ最新鋭の研磨盤数台を用いて船舶用エンジンを製造するなど軍需生産に忙殺され、企業に自由はなく、すべて神戸海軍監督官の指示に従うことが求められました。この頃には既に長田にある本社工場は、川崎造船、三菱重工業、神戸製鋼の三大工場に次ぐ規模となっていました。

やがて軍・政府の方針に従い、茨木と飾磨に工場が新設されます。小曽根喜一郎が社長を務めていた日本羽二重株式会社の工場を改装して、小型エンジン製造工場として昭和14年に茨木工場が稼働します。工場敷地は9,273坪、建物が15棟(2,172坪)、工作機械が83台も置かれる大規模な工場でした。飾磨工場は大型発動機を製造する目的で昭和18年(1943年)から建設に着手し、大林鑄造所を買収して松原分工場としました。終戦時には建坪1,400坪程度の工場が完成していました。

昭和15年(1940年)に初代社長である小曾根貞松が取締役会長に退き、61歳の松元勢蔵が取締役社長に就任します。この時、小曾根真造は27歳であり、戦時の難局に経験豊富な、本小曾根合資会社の番頭でもある松元に経営が委ねられたのでした。その4年後に小曾根真造は第三代社長に就任します。この時、社名を阪神内燃機工業株式会社と名称を変更しました。

本土空襲が激化されることが予想され、1944年7月に旧居留地内の神戸証券取引所ビル(現在の神戸朝日ビルディング) 3, 4階に本社を疎開させました。1945年に神戸市は6回の空襲を受け、長田一帯は焼け野原となりました。鋳物工場の仕上工である中川忠助が殉職します。長田の本社工場には焼夷弾が28発も落ちましたが、幸運にも風向きが幸いし、また社員の懸命な努力によって火は消止められ、焼失は免れました。しかし、疎開先の本社が入る神戸証券取引所は丸焼けになりました。

1945年2月頃から内燃機製造が全面的に中止され、やがて終戦を迎えました。真造は訓示を出し、「覚悟を新たにして手を取り合い、励ましあって進もう」と再興に踏み出します。しかし資材がなく、発動機を生産することは当分できない状態でした。そこで、生活用品を焼失した人々が多かったので、鍋や釜、粉碎機を製造したところ、飛ぶように売れていきました。

食糧難であったため、漁船の需要が高まり、忽ち船舶建造ブームに沸きます。それに応じるように、阪神内燃機工業は漁船用のディーゼルエンジンの生産を再開させました。しかし、エン

ジンが売れても不況によって売上の未収入金が発生します。さらには急激なインフレにより財政状況を圧迫しました。労働三法が制定されると、労働争議が頻発し、兵庫県下で阪神内燃機工業が初めて工場閉鎖するなど、再建は前途多難でした。真造は貞松が住む須磨御殿の東隣に居を構えていましたが、自宅近辺にはビラやポスターが貼られ、阪神電車もストに突入し、親子共々苦境に立たされたのでした。



真造夫婦と子供たち

不眠不休の団交が続くも、真造は「お互いに人の子」という信念を持ち、真摯に対応を続けました。

1946年から1949年まで阪神内燃機工業は会社経理応急措置法による特別経理会社に指定されます。そこで、工場の切り売りや人員整理を敢行し、規模の縮小を図ります。昭和24年(1949年)に飾磨工場を廃止して、工場を日本伸銅株式会社へ譲渡します。昭和27年(1952年)には、ダイハツ工業株式会社と提携して設立したツバサ工業株式会社(昭和27年から昭和41年まで小曾根真造は取締役に着任。後に合併等によって社名がダイハツディーゼルNHN(株)となるも、リーマンショックの影響により2009年に解散)に茨木工場を譲渡しました。

昭和26年(1951年)に小曾根貞松が死去します。朝鮮特需により、設備を拡充させ積極的な生産体制に転じようとしていた再建途上の時でした。会社が立ち直った姿を報告できず、多方面から死が惜しまれました。

良品主義掲げる阪神内燃機工業は昭和28年(1953年)に日本工業規格(JIS)を全国の他業者に先駆けて取得しました。神武景気の波に乗り、設備投資と人材教育に注力して技術の向上と合理化を促進し、海外需要を取り込むことで漸く業績が上向きます。国内需要が落ち込むと輸出でカバーできるようになりました。昭和35年(1960年)には、関連子会社としてモリブデン製錬を行う阪神金属化学工業株式会社

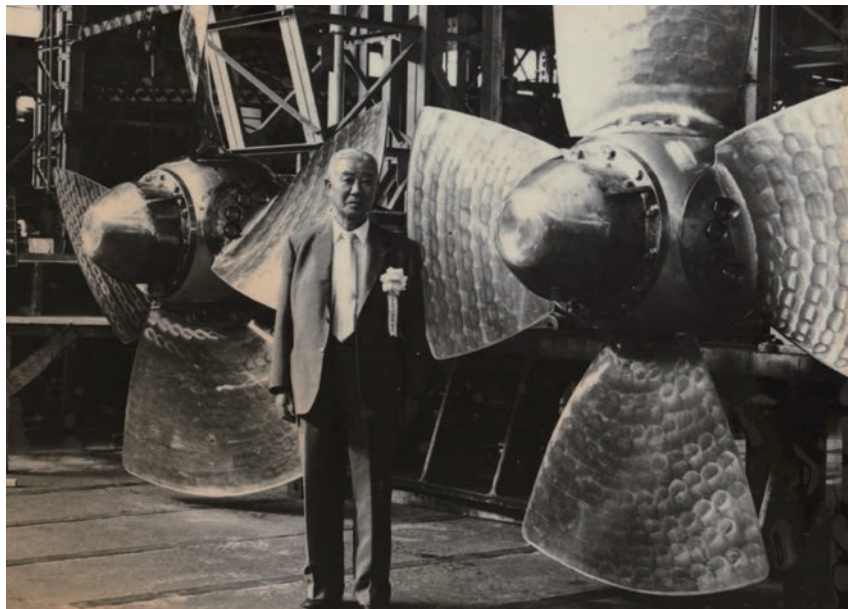


神戸信用金庫理事たちと参拝したとの写真。前列左から2番目が小曾根真造

が設立され小曾根真造が取締役社長に就任しました。さらに設備拡充計画も進み、昭和37年(1962年)には明石工場が完成します。そして、昭和39年には真造の長男である小曾根有が阪神内燃機工業監査役に就任します。

昭和40年(1965年)、阪神内燃機工業は神戸銀行頭取岡崎忠の立ち会いの下、木下鉄工所と合併します。木下鉄工所は同業者であるものの、小型ディーゼルエンジンを中心としていて大型化を目指す途上で、販路も異なっていました。合併の背景には、需給の均衡が崩れたことにあります。船用ディーゼル業界は急速な発展を遂げてきましたが、船腹過剰となり、今後の需要はかなり減退する見通しでした。国際競争にも勝ち抜くには、企業を合同し、生産体制を整理統合し、あらゆる合理化を図ることが最大の急務だったのです。こうして阪神内燃機工業を存続会社として木下鉄工所を解散する合併に至りました。

合併後も小曾根真造は社長を継続し、全社員に向けて「人の和」と「相互協力」を呼びかけました。昭和41年の社内報には真造は次のように述べています。「企業発展の成否は、一人一人の努力する方向が一つになるか、ならないかに掛かっていると言われます。全従業員が心を一つにして目標に向かって進むならば、道はおのずから開けるであろうことを確信いたします。そのためには、まず合併の基礎杭を固く打ち込んで、将来の飛躍に備えていただきますよう、切望してやみません。」



阪神内燃機工業(株)工場にて、小曾根真造の背後にはプロペラ

阪神内燃機工業は、昭和41年(1966年)にダイハツ工業(株)と資本提携します。内燃機業界全体が低迷している中、ダイハツのディーゼル部門と技術や業務を提携することで業績の回復を図ったのです。さらに、赤阪鐵工所と共同設計して誕生したのが、後に阪神内燃機工業の看板エンジンとなるウルトラシリーズです。ウルトラシリーズは大ヒット商品となり、業績に大いに貢献しました。

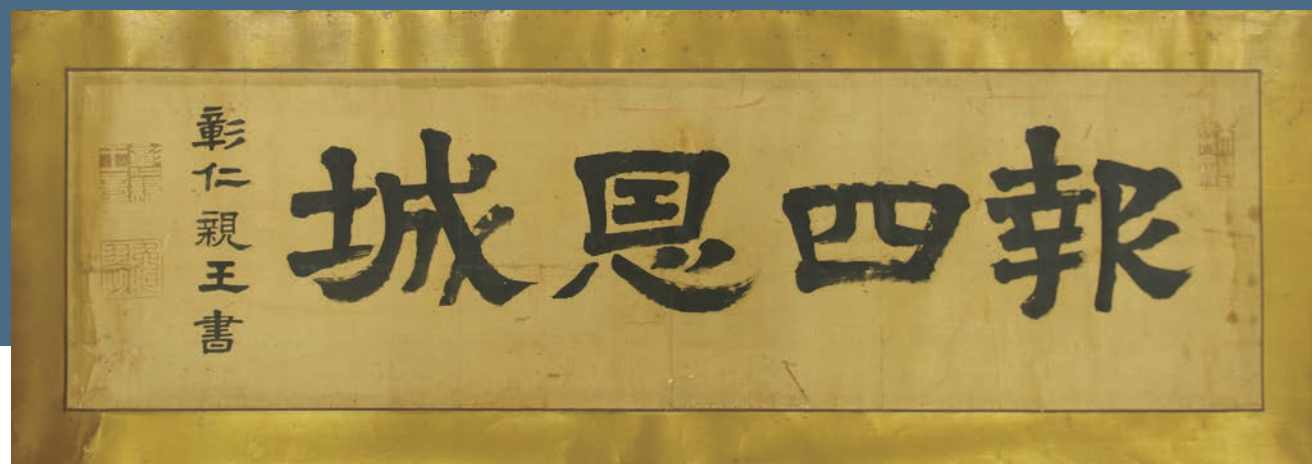
真造は各種団体の名誉職に就任していきます。昭和32年から1年間、神戸ロータリーの会長職に就きました。神戸信用金庫の理事には昭和39年から享年まで就任しています。昭和42年から(社)日本舶用工業会副会長に就任し、昭和48年から昭和54年まで同会会長に着任しました。また、真造は小野ゴルフ倶楽部の設立発起にも携わり、昭和35年に小野観光開発(株)の監査役に就きました。さらに、昭和43年から享年まで阪神電気鉄道(株)の取締役に着任します。第一次オイルショック後の昭和49年(1974)年に真造は阪神内燃機工業取締役会長に退き、後任に木下吉治郎が社長に就任しました。

真造は昭和58年(1983年)に阪神内燃機工業取締役相談役となり、その2年後の昭和60年(1985年)に他界します。昭和6年に入社して以降、55年の長きに渡って内燃機業界に貢献してきた生涯でした。この功績により真造は昭和43年に藍綬褒章を受章、さらに昭和49年には勲三等旭日中綬章を受章しました。

O Z O N E C O L U M N 3

オゾネと社会福祉法人 神戸光有会（旧・神戸報国義会）

「困窮する無告の市民を救済する」という大義のもと、明治23年(1890年)に「神戸報国義会(現・神戸光有会)」が開設されました。同会は貧民救済事業として育児院や施療を運営する全国でも先駆的な慈善活動をはじめました。小曽根家はこの活動に対し、小曽根喜一郎から現理事長まで5代にわたり全面的な援助を行っております。



明治31年、小松宮彰仁親王より賜り、「天長地久」の御染筆とともに老人ホームのホールに掲げられた

神戸報国義会開設当時の社会には、現代のようなセーフティーネットはありませんでした。衛生・防疫体制が未整備だったため、江戸時代後期から明治にかけてコレラが流行し、病気で親を失った子どもの行き場が問題となりました。さらには景気の乱高下によって多くの失業者が発生し、親に恵まれない子女の保護養育や資力なき老幼病者の診療が社会的に求められていました。

神戸では明治17年ごろから目加田栄が救済事業に取り組んでおり、これに対し小曽根喜一郎（三代目）が全面的な援助を行い神戸報国義会が明治23年に創立されました。

小曽根家は「たとえ巨大な利益を得る事業でも国家・社会の繁栄に寄与しないものには手を出さない」という家訓があり、人道主義精神のもと慈善事業に貢献します。

明治25年(1892年)には育児院と施療の施設が開設され、福祉事業が本格的にはじまります。ギリギリのところで生きる人々を引き受け続けてきたこの救済事業は社会的にも注目を集め、明治28年11月には天皇皇后両陛下よりご下賜金拝受の光栄に浴します。さらには小松宮彰仁親王をはじめ総理大臣松方正義、農商務大臣大隈重信、宮内大臣土方久元の視察を得て、親しく激励を

受けました。こうして育児・施療を中心とした救済事業が着々と進められ、今日の礎が築られました。

大正14年には、児童並びに病者の養育診療は年間延4万人、即ち1日平均100人余りの世話をするほど事業は拡大しました。優良社会事業施設として宮内省から特別ご下賜金をいただくようになります。昭和11年には小曽根喜一郎が時価50万円にのぼる広大な土地を同会に寄贈し、施設を拡大させ福祉の更なる充実を図ります。同年、小曽根喜一郎の子である小曽根貞松が同会会長に就任し、従来の育児・施療の2施設に加え、養老・母子・身体



施設内にて、小曽根真造

障害者保護の3つの事業を新たに始めました。5つの総合施設として昭和16年には年間延9万人、即ち1日250人余りの施療保護をするに至り、飛躍的な実績を示しています。

昭和20年3月、太平洋戦争の戦禍により全施設が焼失してしまいます。しばらくは神戸市立救護院を借りて事業を継続していましたが、昭和22年に小曽根家が兵庫区夢野の土地を寄贈し、建物を復旧させます。この土地が現在の施設の場所です。昭和23年に生活保護法による保護施設である養老・救護・医療の3施設と、

児童福祉法による児童福祉施設である養護・母子の2施設を開設し、福祉の谷間にいた人々も受け入れる体制を整えました。

昭和26年に小曽根貞松から小曽根真造が会長職を引き継ぎます。戦後復興を見事果たし、昭和53年には常陸宮殿下が各施設のご視察をなさいました。

小曽根真造は34年間にわたり神戸報国義会の再興に尽力し、昭和60年に息子である小曽根有に承継されます。時代に沿ったサービスを展開していき、昭和61年から短期保護事業を開始します。昭和63年には全国に先駆けて通所事業の認可があり、「施設から地域へ」というフレーズのもとサービスを拡充させていきます。

平成4年(1992年)に福祉事業開始100周年を迎え、「社会福祉法人

神戸光有会」に名称を変更します。平成19年(2007年)にアルブル夢野および地域活動支援センターを開設し、平成24年(2012年)には夢野児童館および「地域活動支援センターゆめの・(発達型)ゆめののつどい」を開設するなど、利用者目線に立ちサービスの向上に努めてきました。

平成28年(2016年)小曽根佳生が理事長に就任し、養護老人ホーム「夢野老人ホーム」、救護施設「アメニティホーム夢野」、障がい者支援通所施設「アルブル夢野」、児童養護施設「夢野こどもホーム」、母子生活支援施設「夢野母子ホーム」、障がい者通所施設「地域活動支援センターゆめの・(発達型)ゆめののつどい」、児童子育て支援「夢野児童館」の7施設を運営しております。



養護院にて、子どもたちとスタッフ。後列左から3人目が小曽根真造



Ⅰ (株)オゾネの前身

小曽根貞松は大正10年3月19日に本小曽根合資会社を設立させ、代表社員となります。同社は有価証券及び不動産の管理を目的とした、いわゆる小曽根家の持株会社としてつくられました。資本金は500万円とし、本店を神戸市兵庫区湊町1丁目284番屋敷に設置しました。小曽根家の多角的事業投資の戦略上、事業を総括する中枢組織が必要となったのです。

貞松の先代である喜一郎が行ってきた多角的事業投資によって多くの企業の株式を保有してきた結果、小曽根家直系企業は(株)阪神鐵工所(後の阪神内燃機工業(株))だけでしたが、傍系企業は数多あり、昭和11年にはその数が58社(保有有価証券の時価総額1,629万円)に及びました。それに加えて、喜一郎は多くの企業の役員にも就いており、それらを貞松が円滑に引き継ぐには、法人を設立させた方が効率的だったと考えられます。

同社設立以降、株式の取得や管理・運用の主体は個人から法人へと変わり、さらには専門経営者をも招聘し、より一層の事業運営に注力していきます。第二次世界大戦がはじまる頃まで(おおよそ26年間にわたり)多角的事業投資を進め、第1表の通り年々持株数を増やしていきました。

第一次世界大戦後の恐慌の中でも保有株式数を増やすことができたのは、いくつかの要因があると考えられます。

まず、多角的事業投資によってリスクを分散し、収益の柱を

複数確保できていたことが恐慌によって資産を減らさなかった大きな要因です。投資額には偏りがなく、特定の会社に依存した収益体系ではなかったことが幸いました。投資先に関しては、鉄道事業や繊維事業、損害保険事業、ガス事業と成長著しい業種に集中しております。特にインフラ系の業界は、欧米列強を強く意識して社会的な発展を日本全体で推し進めていた時代背景から、まさに社会から強く求められた業種として存在価値を発揮し、景気の影響を受けながらも結果的に底堅かったと考えられます。

次に、分散投資させた資産を回収し、再投資を行った経営判断が優れていたことが挙げられます。例えば、恐慌の影響を大きく受けた海運業などに関しては、船成金が興隆する最中に小曽根家が所有していた汽船を売却する等してその事業から撤退しており、急速に海運景気が後退していく中で大損失を被ることを防ぎました。また、資金を過剰に滞留させることなく、第2表の通り適度なバランスを保って投資を実施しています。その投資先は、財界人らと協調して選定されてきた経緯があります。

小曽根家の投資戦略の特徴として、岡崎財閥や川西財閥など資産家が設立させた財閥直系企業を中心に出資しております。資産家が興す企業に対して追従して出資することで資本関係を築き、いわゆる強者連合を形成してきたことが挙げられます。

昭和3、4年頃から神戸のオリエンタルホテルで財界人による午餐会の集まり「オリエンタル・クラブ」が開催されており、そこに小曽根貞松も参加していました。さらに、大正13年(1924年)に創設された神戸ロータリークラブにおいて小曽根貞松は1932～1933年にかけて会長を務めました。こうした社交の場には岡崎忠雄、川西清司、乾新治、鑄谷正輔、九鬼隆輝ら神戸の著名な財界人が集まっており、彼らはそこ

第2表 本小曽根合資会社の主な持株(昭和15年頃)

会社名	持株数	総株数に対する持株数の比率(%)
日本毛織	54,300	5.4
伊丹製絨所	23,330	16.6
山陽皮革	2,000	5.0
神戸生糸	3,145	10.4
第一ラミー紡績	3,440	10.7
神戸電機製作所	5,645	14.1
阪神電気鉄道	72,692	3.6
九州電気軌道	57,250	5.1
神戸海上火災保険	12,700	4.2
朝日海上火災保険	5,800	5.8
新興簡易火災保険 (旧・京都火災保険)	9,150	11.4
オリエンタルホテル	600	10.0
神戸瓦斯	72,900	15.4

※比率は小数点第二位以下切り捨て

で情報交換を重ね、財界人が一体となって事業展開を協議し、失敗するリスクを軽減させてきました。このネットワークから誕生した法人は多くあり、広野ゴルフ倶楽部もその一つです。

また、本小曽根合資会社事業の発展に大きく寄与したのもとして、専門経営者の登用と地域に密着した経営方針が挙げられます。

貞松の時代には、三井銀行神戸支店長であった松元勢蔵を(株)阪神鉄工所取締役及び本小曽根合資会社の総務理事として招聘しています。同氏は長幼の序に厳しく、社内規律が引き締められ、より公明正大に事業が行われました。こうした優秀な人材を抱えたことが、着実な発展を遂げた大きな要因でもあります。

小曽根家の経営方針には、地域との共生が掲げられており、事業活動によって公益をもたらすことを目指しています。これは、神戸土着の名士としての役割または使命として捉えているものであり、目先の収益や自社だけの利潤を追求するのではなく、地域の発展に尽力し、滅私の精神を以って事業を営むよう努めてきました。小曽根家が行ってきた多角的事業投資が社会にもたらした成果としては、鉄道の敷設、社会福祉の充実、ガスの安定供給地域の拡大、保険による事業リスクの軽減、欧米に劣らない品質の洋服が製造されるようになったことなどが挙げられます。地域との共生に重きを置いてきたことが、社会的ニーズに応え、道理に背かず堅実経営を実現させてきたと考えられます。

太平洋戦争がはじまる頃から、本小曽根合資会社は保有

有価証券を減らし、不動産へ資産を組み替えます。これは、戦時経済統制により政府主導で企業の合併が進み、出資先企業がその対象となったため、保有株式を売却したものです。小曽根家の事業は現在に至るまで、政治権力との結合によって得られた利益が全くなく、結果的にこの政府主導の合併による恩恵は一つありませんでした。

昭和20年3月には本土空襲に備えて、本店所在地を神戸市神戸区浪花町の居留地内に移します。小曽根家の私財は六甲の別荘に疎開させていましたが、本社も別荘も空襲により大きな被害を受けてしまいます。阪神内燃機工業(株)の長田の本社工場は奇跡的に焼失せずに残ったので、昭和21年1月より本小曽根合資会社は神戸市長田区一番町3丁目1番地の本社工場内に移転して再興を目指していくことになります。

戦後は、小曽根家直系企業とみなされていた神戸瓦斯(株)がGHQ主導の事業再編によって大阪瓦斯(株)に合併されるなど、経済界が大きく変わってゆきます。財閥解体も影響して多角的事業投資は行われなくなり、小曽根家は直系企業の戦後復興に専念します。

小曽根貞松は阪神電気鉄道(株)の社長として、小曽根真造は阪神内燃機工業(株)の社長として、それぞれ再興に尽力します。特に戦後の阪神電気鉄道(株)は難航する復興に加え、労使闘争の課題が噴出し、貞松はこの混迷期である1946年10月から1950年4月まで社長として命を燃やし、退任後の1951年11月に他界します。貞松には従六位勲四等が贈られました。

小曽根真造は、エア・コンディショナーで成功を収めた東洋キャリア工業(株)と販売代理店契約を結び、空調設備事業を主とする多聞商事(株)を昭和40年(1965年)3月に設立させます。昭和43年(1968年)には真造が会長職に退き、小曽根路子が代表取締役役に就任します。第二多聞ビルディング内にて多聞商事(株)は空調事業に加えて、屋号を「ナショナルたもん」としてナショナル製の家電販売も行いました。岡山事業所も構え、年商10億円規模の企業となりましたが、後に家電販売から撤退し、平成元年には空調事業からも撤退します。財務基盤の安定化のため、多聞商事(株)は昭和57年に本小曽根合資会社と合流しました。合併後の名称は株式会社オゾネとなり、現在に至ります。



左から小曾根有、小川淳子、小川裕、小曾根利子



小曾根 有

小曾根真造がハネムーンを兼ねた欧州遊学中の昭和4年（1929年）9月に長女が誕生します。ロンドンで生まれた淳子はイギリス人の女中2人に育てられ、英語が話せる日本人の子どもとして大変可愛がられたようです。松坂屋社長となる伊藤鈴三郎がちょうどロンドンで独身生活を送っており、淳子の名付け親になってもらいました。

真造は貞松の須磨御殿の東隣に洋館を建てます。真造邸の北隣には日本画家の大橋翠石が住んでおり、「阪神間の資産家で翠石の作品を持っていないのは恥」とまで言われる人気絶頂の画家であったため、小曾根家も松方幸次郎らとともに後援していました。他に小曾根家は甲州武田氏の末裔であり20世紀最高峰の日本画家と名高い村上華岳も後援しています。他に、藤田嗣治の裸婦像や横山大観の絵画なども飾られていましたが、戦後の混乱でその多くが失われました。

真造が（株）阪神鐵工所に入社する1ヶ月前の昭和6年（1931年）1月に長男が誕生します。長男は有と命名され、小曾根家の家督を引き継ぐことになります。有は同和火災海上保険（株）で損害保険の実務を経験した後、本小曾根合資会社に入社します。さらに阪神内燃機工業（株）の取締

役や神戸光有会の理事長などを歴任しました。昭和57年（1982年）からは（株）オゾネの代表取締役となります。平成11年（1999年）から1年間、神戸ロータリークラブの会長に着任します。神戸ロータリークラブの会長就任は貞松、真造に続いて3代連続となりました。

神戸ロータリークラブには4つの宝があり、その内の一つに小曾根淳子が登場します。ロータリー創始者ポール・ハリス夫妻と国際ロータリーのヒル会長が昭和10年来神したときに、川崎芳熊のご令嬢敏子と真造の長女の淳子がハリスとヒル両夫人に花束と絵日傘を贈った記念写真がその宝の一つです。

また、小曾根有の弟には、ジャズピアニストの小曾根實がいます。小曾根實には眞と啓の二人の子息がおり、親子そろってジャズ奏者となりました。長男の小曾根眞はパークリー音楽大学を首席で卒業し、世界的なジャズピアニストになりました。次男の小曾根啓



小曾根 實

もパークリー音楽大学を卒業し、サックス奏者として神戸ジャズ界に多大な功績を残しています。

戦後すぐの本小曾根合資会社の特徴は、資産のおおよそ8割が有価証券で占めていたことが挙げられます。多角的投資による配当収入を得る目的で保有しており、小曾根家が支配する会社は阪神内燃機工業と商社のトキワ商会だけでした。財閥解体が進められる中、莫大な財産税と富裕税が課税されます。戦後不況によって無配当の企業が続出し、現金収入が乏しい中、支出していくキャッシュは膨大で、大量の株式を手放さなければならない危機的状況となりました。やがて本小曾根合資会社は持株会社としての性格を失うことになります。

配当収入に頼らない事業運営をするために、不動産事業に加えて、保険代理業と小売業を昭和24年から新事業としてスタートします。阪神内燃機工業OBも在籍し、事業を盛り立てました。

本小曾根合資会社は長田にある阪神内燃機工業（株）の本社建物内に会社がありました。今の本社が位置する神戸市中央区中町通3丁目2番15号に移ったのは、進駐軍が撤収した後の昭和33年です。それまでは同地を進駐軍が接収していました。戦前は大開通沿いに路面軌道が走っており、市街地として大きく発展していましたが、戦後その一帯は焦土と化した荒地地になっていました。その地に進駐軍の西部キャンプ地として兵舎が建てられたのです。

昭和33年に現本社所在地に多聞ビルディング（多聞分譲施設付住宅：現都市再生機構と区分所有）が竣工します。地上5階、地下1階建の店舗付き集合住宅とし、これを本小曾根合資会社の中核不動産としました。敷地面積は4,400㎡に及び、西側と北側にL字型に建物が建ち、駐車場も完備しました。地下1階と地上1階にはテナントが入り、上のフロアは日本住宅公団の公営住宅となっていました。その2階の東側のテナント1室に本小曾根合資会社は本社所在地を移したのです。

多聞ビルディングは当時としては珍しく冷房を完備する建物でした。戦後復興の地域のシンボルを目指して、「百貨多聞」というブランド名で百貨店を経営します。テナントは時代と共に変化していき、次第に百貨店としての面影をなくしていくようになります。震災前のテナントには、昆布屋、地図屋（ゼン



阪神淡路大震災で全壊して取り壊している多聞ビルディング

リン）、大阪暖房空調機事務所、骨董店、喫茶店、旅行会社などが入っていました。

昭和57年（1982年）には本小曾根合資会社は小曾根落子が代表を務める多聞商事（株）と統合して、株式会社オゾネとなりました。この時に小曾根有が社長に就任します。貸地料、貸家料、駐車場料などの不動産による収益源が手堅く、数多の戦後不況を乗り越えましたが、多聞商事のメインビジネスであった空調設備事業は後に撤退しました。

戦後最大の苦難が平成7年から訪れます。阪神淡路大震災です。この震災によって中核不動産が全壊しました。幸い、従業員に死傷者は出ませんでした。平成7年（1995年）から再起を図るべく仮設の事務所で駐車場経営を営み、窮地を凌ぐことになります。

西国街道をメイン道路として新開地から神戸駅まで非常に栄えていましたが、戦後から賑わいは徐々に三宮に移っていき、ついには震災によってこの地域はすっかり寂れてしまいました。ホームレスも目立つエリアになり、ついにはハーバーランドまで苦戦していきます。地域の特性が変化していったので、昔と同じようなビルを建設しても、賑わいを取り戻すのは難しいように思われました。オフィス市場は供給過多となっており、再建する不動産のコンセプトはなかなか定まりませんでした。

神戸駅北側は住宅地としてマンションが多く建設されました。商業地域から住宅地域へと姿を変えていったのです。JR神戸駅、高速神戸駅、バス停など交通便が非常に良い地域でもあったので、通勤帰りの客層も取り込めると考え、大型スーパーマーケットを誘致する計画が浮上します。

こうして平成18年（2006年）10月より中核不動産にスーパーマーケットのLIFEがオープンします。11年もの年月を費やしましたが、ようやく震災復興が叶った出来事でした。



設立記念祝いにて。後方左から、小曽根佳生、知晃

小曽根有の姉である淳子が小川家に嫁ぎ、昭和32年(1957年)12月に長男が誕生します。佳生と命名され、後に小曽根家の家督を継ぐことになります。小川家は貿易商を営み、昭和12年8月に小川鈴吉が法人を設立させました。昭和30年から株式会社小川商会と法人組織変更を行い、今日は公害測定用機器や分析装置を取り扱っています。佳生は甲南大学卒業後、1980年に(株)小川商会に入社し、2003年に同社の代表取締役になります。小曽根有に嫡子ができなかったため、小曽根家の後継者として1987年に(株)オゾネに入ることになりました。

1989年に佳生は、山口善五郎の末裔である森環と結婚し、長男の知晃と長女の愛加の二児に恵まれます。山口善五郎是三和銀行(現・三菱UFJ銀行)の母体の一つになった



小曽根 佳生

三十四銀行を創設した一人です。山口善五郎の息子の山口善三郎は住吉村に住み、明治43年(1910年)には平生鈺三郎らとともに甲南学園の創立に尽力しました。

佳生は2001年に小曽根有の養子となり、姓が小川から小曽根に変わりました。不動産部門を担当し、会社の資産の運用を行います。平成5年に会社が所有していた真造邸を取り壊し、駐車場としました。後に、神戸市が道路新設工事を計画し、ちょうど旧真造邸もその計画のエリアに含まれていたため、平成11年に土地を神戸市に売却します。しかし、桜木町の道路新設工事は地元住人からの反発に遭い、20年余の歳月を経ても計画は実現していません。

平成12年からプロジェクト案件が3件始動します。賃貸

マンションのメゾンベール夙川と、商業ビルのアルフィー岡本の2件の不動産を購入し、さらに賃貸マンションのOZパレスの建設に取りかかります(平成14年完成)。平成24年にはアルフィー岡本にて日常生活雑貨を取り扱う小売店「OZSELECT」をオープンさせます。

小曽根佳生は平成28年(2016年)に(株)オゾネの代表取締役社長に就任します。会長に退いた小曽根有はその翌年1月に他界しました。

平成30年には賃貸マンションのOZ Casaが完成します。そのエントランスには、美術作家である小曽根環(京都市立芸術大学大学院美術研究科修了)の作品が設置され、神戸らしい、おしゃれで住みよい空間の提供を行っております。

小曽根佳生は数々の役職を引き継いでおり、2011年より

部門紹介

弊社は永く神戸に根差して地域経済や社会の一助となるべく堅実に事業を営んでまいりました。現在、【不動産部門】、【保険部門】、【インテリア雑貨小売部門】の3つの事業を営んでおります。

【不動産部門】について

不動産部門は、弊社が本社を置く中核不動産を中心に不動産賃貸業を営んでおり、「入居することでメリットのある空間」をご提供できるよう、顧客満足度を高める姿勢を徹底して堅実な経営に努めています。

不動産部門は先祖代々大事に守ってきた不動産を中心に複数所有しており、不動産の売買を目的とはせず、不動産賃貸業を主として営んでおります。阪神・淡路大震災からの復興の際に確立された方針「入居することでメリットのある空間」を言葉通り忠実に設計することで、その土地と調和し永くお客様に親しんでいただいております。中核不動産には大型スーパーマーケットが入居しており、また賃貸マンションは非常に高い入居率を実現しており、業績は堅調に推移しております。

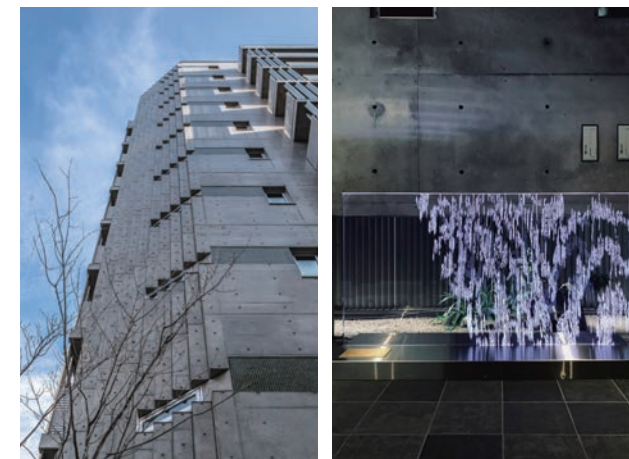
市場全体で見ると、個人投資家をターゲットとした不動産投資を目的とする物件が増加傾向であることや、少子高齢化に伴う人口減少局面に差し掛かるなど外部環境の変化によって、不動産賃貸物件の市場供給量が過剰気味であることが懸念されます。そこで弊社は、その土地に求められる

阪神内燃機工業(株)の取締役役に就任、2016年より社会福祉法人神戸光有会の理事長に就任、他にも、湊川神社の責任役員、宝球寺の責任役員、社会福祉法人神女きずな会の監事、神戸信用金庫の第一区総代、麤皮の監査役などに就任しています。

国の施策に呼応する経営も心掛けており、平成31年4月26日に金融庁より経営力向上計画の認定書をいただき、また、令和2年3月27日には事業継続力強化計画について、近畿経済産業局長から認定をいただきました。

さらに働き方改革の一環として、育児のしやすい職場環境を目指し、「両立支援対策の充実を目指す行動計画」を策定しました。令和2年3月12日には、兵庫労働局により一般事業主行動計画が受理されました。

不動産、すなわち「入居することでメリットのある空間」を適切に設計することで他の物件との差別化を図ります。収益目的だけで不動産を所有するのではなく、その地域と調和がとれ、かつ利便性が高い設計することで顧客ニーズを取り込むよう努めています。神戸らしい洗練された建物として、永くその地域に親しまれることが重要な要素だと思料いたします。このように基本的な顧客ニーズを十分に満たし、なおかつ付加価値を付けることで、入居率と賃貸料の安定した推移を実現しています。



【保険部門】について

保険部門は損害保険と生命保険を取り扱い、東京海上日動火災保険株式会社及び東京海上日動あんしん生命保険株式会社と、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社及び三井住友海上あいおい生命保険株式会社の代理店となっております。

かつて小曽根は神戸海上運送火災保険(株)と朝日海上火災保険の会社設立に尽力したことがあり、古くから損害保険に携わっています。長年築き上げてきた「伝統」「歴史」「実績」に見合う貢献ができるよう研鑽に励み、顧客ニーズに応えていけるよう努めます。

2019年1月には生命保険媒介業の認可を取得し、お客さまが抱えるリスクを網羅的にカバーする体制を整えました。保険市場における顧客ニーズは多様化が進んでいます。人口減少の局面を迎えた今日、国内市場の拡大が見込みにくいことから、持続可能な成長を実現するために、生損保に係る有益な情報を提供することで、保険部門の市場浸透を図ります。

台風や地震、疫病といった多くの自然災害を受けてきた経験から、保険の必要性が改めて認知されました。損害保険代理業を営んで培ったノウハウを武器に、適切にリスクを評価し適当な保険商品を提案することで、お客さまに最適な補償プランを設計いたします。さらに、2020年にはお客さま第一の業務運営方針を定め、お客さまの最善の利益を実現していくことを目指しています。

2019年に通称「バレンタインショック」と呼ばれる、法人向けの節税を謳う生命保険が販売停止となり、2020年には新型コロナの影響により営業活動が大きく制限されるなど、非常に厳しい事業環境が続きますが、生損保のクロスセールの機能をさせ、お客さまが安心して生活できるよう微力ながら努めてまいります。



【インテリア雑貨小売り部門】について

2012年9月に神戸岡本のインテリア雑貨セレクトショップとして「OZ SELECT」を開業しました。阪急岡本駅の近隣に立地しており、岡本に住む主婦層に対して、日常生活にあると嬉しいアイテムを揃えています。量販店で売られているような量産品ではなく、作家ものや、デザインや品質が優れているアイテムを厳選して仕入れています。

大抵の物はネットで購入できますが、店舗を持つ強みは、実際に見て触ってみるという体験ができることです。弊社が取り扱う商品は、神戸岡本のライフスタイルに適したものでばかりです。いい商品には、それができるまでのストーリーがあり、技術や流派の系譜があります。店舗で見えて触れた体験から感動が生まれ、その商品をもっと知りたいという知的欲求を掘り起こすことを目指して販売に取り組んでおります。このようにネット販売ではできない、店舗での体験から価値提供を行い、競合他社と差別化をしているのです。

平成17年頃から雑貨小売業界は売上が増加傾向にあります。その要因として、各地に雑貨用品を取り扱う量販店が出店され、多品種低価格商品をラインアップしたことで、幅広い世代が客層になったことが挙げられます。さらに、ネット通販が台頭したことで、業界としては成長しましたが、競争がより厳しくなり、誰に何を訴求するのか明確に方針を定めることで他社との差別化を図らなければなりません。

長期的に見れば、少子高齢化や新設住宅着工戸数の減少が影響し、インテリア雑貨の業界規模は縮小することが見込まれますが、「OZ SELECT」は神戸岡本らしい居住空間を提案し、地元にも愛され続ける雑貨屋として努めてまいります。



インテリア雑貨
「OZ SELECT」

●まとめ

市場動向については3部門とも競争が厳しい環境下であり、顧客ニーズもその時々によって移り変わり、同時に多様化も進んでいます。3部門とも、流行に左右されずしかし顧客ニーズに応えていけるよう専門性や独自性を高めていくことでお客さまメリットを最大化させ、地域社会にウェルフェアをもたらすよう活動しなければなりません。

戦争や震災、不況など数多の試練を乗り越えて、社会全体の利益を常に考え、公明正大に事業を展開してきたことが弊社の行動指針の根底にあります。「伝統」「歴史」「実績」を大切に、長期的な視点をもって、顧客ニーズを満たすべく柔軟に行動すること。そして地域との共生を実現すべく堅実に事業を営むこと。これらを念頭に社員一丸となって行動することが、堅実経営の基盤となっています。

その行動指針は、経営の基本姿勢に示されます。5つの基本姿勢のもと、地元神戸の発展とともに成長できるよう代々事業を営んでまいりました。



ライフ開店日のテープカット。左から4人目が小曽根有

●経営方針

小曽根家は神戸の土地に発祥し、神戸とともに時代を歩んできました。酒造業、貸家業、金融業、酒樽製造業、多角的事業投資を行い、神戸産業経済発展の過半に尽力しました。こうした歴史から下記の通り5つの基本姿勢が形作られました。

①堅実性

小曽根財閥の中核企業としてその資産管理を行ってきた会社であり、常に堅実経営を実践しております。

②柔軟性

近年のめまぐるしい時代の変化に機敏に対応し、柔軟性・先見性をもって挑戦し続ける積極性を併せ持ちます。

③顧客視点

常に顧客の視点に立ち、顧客の望む変化を把握してそれを実現することにより時代に対応してまいります。

④継続性

我々は過去から引き継いだ「伝統」「歴史」「実績」といったものを大切に、流行に左右されない長期的な視点をもって事業を運営していきます。

⑤地域との共生

小曽根家は神戸に発祥し神戸とともに歩んでまいりました。これからも地域の発展とともに小曽根家も発展できるよう、微力ながら貢献してまいります。

弊社は常に本業をもっていかに社会的に貢献していくかということを考え事業を営んできました。

社会がいま求めているサービスを提供できるよう、目先の利益にとらわれずに、

しかし適切な収益をもたらしながら堅実経営をしてきた歴史があります。

社会とともに持続的発展ができるよう長期的な視点をもつことを心掛けてきました。

弊社は次の100年へ向け、より精進してお客さまのお役に立てるよう努めてまいります。

こうした事業活動の積み重ねが、地域社会の公益に繋がることを切に願い、

引き続き“住みよい空間で安心して生活できるサービス”を提供してまいります。

O Z O N E C O L U M N 4

伝説上のオゾネ

本章では、1600年以前の小曾根一族に纏わる伝説を記します。これらは先祖代々伝わる言い伝えを書き残すことを目的とし、客観的に認められる事実とは限らないことをご留意いただきたく存じます。南北朝時代から戦国時代にかけて神戸の地は幾度となく戦乱に巻き込まれた影響からか、本稿作成にあたり調査した結果では言い伝えを直接的に補強する資料は見当たらず、今後の新発見に期待したいと思います。

tradition 1 官軍に味方し戦った小曾根三郎

小曾根家には代々伝わる南北朝時代の話があります。それは、南北朝時代に官軍に味方し、小曾根おどし緘という鎧を着て新田義貞らとともに戦い、その功績から後醍醐天皇より小曾根姓を賜った、という内容です。寛政年間と思われる楷書と草書で書かれた二巻の小曾根家古文書があり、一部抜粋いたします。

“新田佐兵衛ノ頭、源ノ義貞朝臣ノ臣、白藤七郎左衛門源ノ朝影、延元元年足利尊氏、弟直義、高師康、同師直をつれて西国の兵二十万余騎を海上より津ノ国和田の右手に攻め上がりたる時、ある夜、北風大風となり。その風に乗じて七郎左衛門火をはなつ、尊氏の軍兵大半を失いたり。尊氏難を兵庫柳原福海寺の庫裡に

避けて身をかくす。未だ軍機定まらざるうち、みだりに事を興したるため、七郎左衛門は暫時閉門の身となる。後ち義貞朝臣は越前の国におちのびたり。”

“七郎左衛門に二子あり、兄を北風と称し、弟を小曾根と称す。兄の称を北風と申すは軍機定まらざるに事を興したるため北風と称す。弟は小曾根おどしのよろひを着し居りたるため小曾根三郎と称す。後の北風家は兄の方の末孫、弟は小曾根家の祖先なり。としたゝめありたり。”

（考察）この話は北風荘右衛門が代々受け継ぐ北風伝説と類似する部分が多くあり、大筋の内容は一致しております。

北風伝説との相違点は、時期と名

前が挙げられます。北風伝説では、建武3年（1336年）2月の兵庫合戦（新田義貞らの活躍により足利尊氏が九州へ敗走する戦）であるのに対し、小曾根家古文書では延元元年（1336年）5月の湊川の戦い（九州から足利尊氏が東上し、楠木正成が殉死した戦）の場面を述べています。また、北風遺事によると、北風（喜多風）姓と改めたのは白藤彦七郎惟村（後の喜多風貞村）であり、その弟は白藤彦村と北風家の家系図に記されています。その白藤彦村は湊川の戦いにおいて生田森の東にて戦死したと北風遺事に記載されており、小曾根古文書に当てはめると弟である彦村が小曾根三郎に該当すると考えられます。しかし、北風遺事によると、北風姓に改めた貞

村の父は白藤頼村とされ、小曾根古文書の白藤七郎左衛門源ノ朝影とは相違しており、全体的に名前が一致していません。北風一族の中でも分家によって伝説が少し異なるようですが、小曾根家古文書の内容は部分的に史実と相違しており、さらには『太平記』では北風による攻勢の場面の記述はありません。

民俗学者の赤松啓介は北風伝説について創作であると指摘しています。小曾根家古文書に記載されている話もまた事実と伝説を混合させた創作の可能性もあります。小曾根宣孝の三男である喜多甚七が北風一門に入り、北風家番頭格の喜多一統総支配人となっていることから、その権威の正統性を周知する狙いで小曾根家と北

風家の深い繋がりを示す話を北風伝説に倣って創作した可能性も考えられます。

小曾根家古文書は、樋上権兵衛著（1957年）『郷土産業史 会社の歩みと巨人の足跡』（株式時報社発行、231頁）に一部引用され文字資料として残っていましたが、今回の調査において原本を発見することが叶わず、この一次資料に辿り着くことができれば新たな発見も期待できるかもしれません。

伝説が創作であり内容が相違していたとしても、建武の時代にはすでに白藤一門は支流だけで21家あったとされ、他にも「白藤家記録」等が伝えられています。19世紀中期頃には湊八幡宮境内に白藤明神が建立され

（空襲により焼失）、白藤家の土地に建立したとされる藤之寺が現在まで存続し、尼ゼ文書が北風家家訓として伝えられてきたことを考えると、先祖の足跡を感じることができます。

小曾根家の伝説はもう一つあります。それは、元弘3年（1333年）5月に後醍醐天皇が隠岐から京へ戻る途中に立ち寄った兵庫の福厳寺にて、小曾根家は天皇より陣羽織を賜ったというものです。（後醍醐天皇より小曾根姓を賜ったという話もあります。）史実においても、福厳寺で楠木正成ら七千騎が後醍醐天皇を出迎えており、その中に小曾根家がいた可能性があるので



『足利尊氏兵庫合戦』（神戸市立中央図書館 貴重資料デジタルアーカイブズ）
足利尊氏が新田軍に追われている様子が描かれており、足利尊氏の後方には青い鎧を着た白藤がいる

小曽根家の始まりは、『太平記』に登場する児島高德という説もあります。日本家系家紋研究所著(1991年)『小曽根・小曽禰一族』(日本家系協会出版、21丁表～22丁裏)によると、児島高德の流れを汲む小曽根一族が存在し、備前国児島郡に曾根の地があり、備前三宅氏児島庶流小曽根一族があると記されています。

児島高德は南北朝分裂後も一貫して南朝に仕えた忠臣であり、百済王族の末裔と称する備前三宅氏の血筋とも言われています。太平記の内容の真偽については考察を省きますが、児島高德の晩年は上野国邑楽郡(現在の足利市の南、館林市の西隣)で過ごしたとされ、そこには同氏が1380年に開基したとされる高德寺が

現存します。その近隣には上野国藤原姓小曽根氏や下野国源姓小曽根氏が定住しており、児島一族が上野国に移り住んで以降に小曽根一族と血縁関係が結ばれた可能性が考えられます。中興武家系図に記載があるようですが、今回の調査では資料を閲覧することがかなわず、神戸の小曽根一族と関係があるかは不明です。

千鹿野茂編(1998年)『続家紋でたどるあなたの家系』(続群書類完成会出版、P17)によると、小曽根家の家紋である「六角井筒に一つ巴」は下野国の藤原氏秀郷流佐野氏族の小曽根のものである、と記載されています。

(考察) 藤原氏秀郷流佐野氏族の家系図を紐解くと、佐野氏の庶流の中から柴田姓、武沢姓を経て綱長、氏高の兄弟2名が初めて小曽根姓を名乗っていることが確認できます。彼らは1500年代に在世していたものと推測されます。この小曽根氏は上野国山田郡桐生の小曽根邑にちなむもので、上野国藤原姓小曽根氏と呼ばれています。しかしながら、この一族がどのような経緯で神戸の小曽根一族と繋がったのか示す資料はありません。

これとは別に下野国源姓小曽根氏もあります。藤姓小曽根氏と同族、あるいは繋がりが深い氏とされていますが、家紋は足利家の定紋である丸に二引両であり、先祖は源姓足利氏より別れ、足利尊氏の遠戚であるとい

われています。田代善吉氏著(1972年)『栃木県史』(第7巻)によれば1500年代には足利家一党御厨重郎忠国の末孫である小曽根政義が鉢形城の城主を勤めていたと記載されています。同城は関東の中心と目されていた古河御所から五十キロ程度の距離にある要所でした。当時のこの地域では関東管領上杉氏と後北条氏との戦いが絶えず続いており、これに関東の諸将は翻弄され続けていました。館林市教育委員会、館林市立図書館編(2001年)『館林双書第29巻館林記』によると、小曽根政義は1570年頃から長尾家についていたが、1578年上杉謙信死後は御館の乱、甲斐武田氏の侵攻、天正壬午の乱などを経て1588年には小曽根政義はついに北条氏に降伏し、そのまま北条氏に仕えたとされています。小曽根政義は北条氏滅亡後1590年に常栄寺を今の群馬県館林市に開きました。同寺に現存する墓石を見ると、小曽根氏は現代まで代々その寺で埋葬されてきたことが分かります。

さて、藤原氏秀郷流佐野氏族の発祥の地は下野国阿蘇郡佐野庄とされています。この地に藤原北家秀郷流の系統である藤姓足利氏の庶流として平安時代末期から土着していたようです。なお、足利尊氏は源姓であり、藤姓足利氏とは血縁関係はありません。この他に美濃国や三河国、甲州でも藤原氏秀郷流佐野氏は見られます。甲斐国でよく使われる家紋「立ち梶の葉」を用いている藤原氏秀郷流佐野氏族も存在するようです。甲州の藤原氏秀郷流佐野氏族は暫し諏訪氏族佐野氏と混合されていることもあるように思われますが、それは下野国の大名であった藤原氏秀郷流佐野氏族佐野信吉が1611年改易処分となり信濃国松本に配流されたことが影響しているように推測できます。

しかし、佐野家家臣団に小曽根氏がいた記録や、小曽根氏が美濃国や三河国、甲州などに定住していた記録は今回の調査では発見できませんでした。

小曽根の先祖を推察するコーナーです。

神戸の小曽根一族に関して調べた結果、俳句や墓など1600年代に兵庫の地に在世していた痕跡が見つかりましたが、1600年以前の資料はほとんどありませんでした。一方で、南北朝時代に官軍に味方した功績により後醍醐天皇から小曽根姓を賜ったという伝説や、曾根一族との関係性を推察できる小曽根家の墓石、藤原氏秀郷流佐野氏族小曽根とされる家紋「六角井筒に一つ巴」、橘氏族との血脈を示唆する小曽根家古文書など、先祖を知る手掛かりはありました。しかし、『讃岐屋』と『樽屋』との間で本家筋が変わったり、婿養子をとったりと家紋が変わる事象も起きており、先祖調べが複雑化しています。

小曽根姓はもともと下野国や上野国に多く存在していました。その一派が兵庫に根付いて後に『讃岐屋』として酒造業を営んだものと推測できますが、その根拠となる資料は今回の調査では発見できませんでした。小曽根家は1600年代には兵庫で酒造業を営んでいることから、よそ者がいきなり造酒用の土地と技術を手に入れることは非現実的であるため、古くから兵庫に根付いていたと考察できます。伝説にあるように延元元年(1336年)頃から連綿として兵庫に在住している一族だとしたら、どのようにして小曽根姓を名乗るに至ったのでしょうか。小曽根姓という珍しい名字を名乗るには何かしらの経緯があるはずですので、夢を広げて考察します。



1. 地名から名字が誕生した可能性

『日本歴史地名大系29I 兵庫県の地名I』(平凡社、1999年)によると、小曽根という地名は貞応元年(1222年)に摂津国武庫郡の村名として古曾禰村と表記されているのが最古のようです。それから小曽根もしくは小曽禰荘として現在にも地名が残っています。地名にちなんで名字が誕生する事例は多くあり、神戸の小曽根氏もその類いである可能性もあります。

2. 元寇の際、北関東から土着した可能性

蒙古来襲(元寇1274年、1281年)の際、武蔵七党の各武士団・諸氏族は鎌倉幕府の命を受け、安芸国・九州まで下向し土着した者がいます。この中に小曽根氏がいるようです。この中に小曽根氏がいるように、西国に土着している可能性もあります。

3. 南北朝時代に北関東から小曽根氏が神戸に土着した可能性

南北朝の戦いの折に新田義貞らとともに小曽根氏が北関東から近畿へ行き、そのまま兵庫に土着した可能性が考えられます。兵庫津には南北朝時代に官軍に加勢したとされる北風家がある他、新田義貞に味方したとされる武蔵七党の丹治氏をルーツに持つ榊井家があります。このように南朝に味方し、湊川の戦い後に兵庫に根付いた家が存在することから、小曽根氏もそれらの家と同じような命運を辿ったのかもしれない。

4. 備前三宅氏児島庶流小曽根一族である可能性

前述の児島高德は小曽根一族が多くいる上野国に移り住んでおり、この児島一族が小曽根一族と血縁関係を結んだ可能性があります。神戸の小曽根のルーツがこれだとすると、備前三宅氏児島庶流小曽根一族の家紋が藤原氏秀郷流佐野氏族小曽根の「六角井筒に一つ巴」となり、やがて兵庫に移住するという過程を踏むことになります。

5. 武田家家臣の曾根一族である可能性

かつて兵庫津三十八ヶ町の一つ湊町にあった小曾根本宅の邸内には、“天白神社”として祭られていた祠があったと伝えられています。また、赤松啓介著（1980年）『神戸財界開拓者伝』（太陽出版、463頁）によると、株式会社IHI相生事業所構内にある天白神社は、小曾根邸内に祭られていたとされる天白神社の分霊を奉祀したものとされており。

天白信仰および天白神社は関西圏では非常に珍しく、長野県、愛知県、静岡県など中部地方を中心に広く分布しており、これは武田家が支配していた地域も含まれます。現存しているものから窺える特徴は、比較的どれも小さな祠である点です。調べると、古来より民間信仰として天白信仰なるものが諏訪湖や天竜川流域を中心に存在し、1900年初頭には謎だらけの信仰として研究者を悩ませていました。

小曾根邸内にあったとされる祠は残念ながら現在は確認できません。天白信仰の言い伝えや伝説も受け継がれておらず、はっきりとは分かりませんが、関西に所縁のない天白神社を奉祀するには何かしらの理由があったと考えられます。

小曾根邸内に天白神社が祭られていたという事実から、小曾根家が中部地方にいる天白信仰の人間との深い繋がりがあった可能性と、天白信仰を信奉する者が兵庫に移り住んだ可能性の2つが推察されます。曾根一族との繋がりを示す根拠ではありませんが、中部地方所縁の天白神社が小曾根邸内にあったという事実はその関係性を示唆するものであるのかもしれません。

また、小曾根家古文書によると、白藤七郎左衛門源ノ朝影の次男である小曾根三郎が先祖とされていますが、この説は事実を混合させた創作の可能性が高く、小曾根三郎という名前は武田家家臣曾根一族の祖「大曾根八幡太郎曾根加茂之次郎小曾根新羅三郎」から拝借したものと推察されます。

推測となりますが、武田家滅亡後、武田家家臣曾根一族が離散し、その一派が兵庫の地で酒造を営む家と血縁関係を結び、後に小曾根姓となったのかもしれません。



IHI相生事業所構内にある天白神社
(写真提供:株式会社IHI)

6. 藤原氏秀郷流佐野氏族

小曾根家の家紋は「六角井筒に一つ巴」であり、これは屋号を「樽屋」とした時代から確認できます。屋号が「讃岐屋」であった時代の小曾根家の家紋は確認できませんが、1600年代にはすでに兵庫津で「讃岐屋」の小曾根甚右衛門と称して醸造を行っていることから、「六角井筒に一つ巴」を家紋とする藤原氏秀郷流佐野氏族小曾根が1600年以前に兵庫の地に定住したことは事実だと考えられます。

「讃岐屋」の屋号の由来として、現在の群馬県邑楽郡明和町大佐貫を中心とした佐貫庄の地名から付けられたことが推測されます。『群馬県史 資料編7中世3』（P.237）によると、文明2年（1470）9月3日付『伊勢大神 宮禰宣 荒木田氏経 書状寫』には「讃岐庄地頭赤井」と表記されており、佐貫庄は讃岐庄と称されることもあったと推察できます。前述の小曾根政義は館林城主赤井照康の家臣として鉢形城主を勤めており、小曾根家は佐貫庄の地と深い関りがありました。



『新形三十六怪撰 藤原秀郷竜宮城蜈蚣を射るの図』
(写真提供：東京都立中央図書館)

7. 1600年以前は小曾根姓を名乗っていなかった可能性

兵庫の小曾根一族において、資料として見つかる最古の小曾根姓は、1600年代に在世した小曾根甚右衛門となります。「讃岐屋」として酒造業を営んでいた小曾根家は俳諧を嗜んでおり、それは兵庫津旧家の捶井氏と並んで郷土における先進の家とみなされていました。小曾根家は捶井家との繋がりが深くあり、小曾根甚右衛門の娘が「正直屋」の捶井伴貞（?～1676年）に嫁ぎ、二児に恵まれたそうです。捶井伴貞の次男である捶井伴弘（?～1718年）も従妹である小曾根甚右衛門の娘およしを娶り、屋号を「正直屋八左衛門」と称しました。小曾根家と捶井家は2代続けて血縁関係を結んでいました。

寛文7年（1667年）の俳書続山井に小曾根道慶と重命の句が記載されています。小曾根道慶は延宝7年（1679年）に没しており、この時には既に小曾根は兵庫醸造三大名家に数えられていました。醸造を生業としていたことから、家の歴史は古いものと考えられます。なお、「讃岐屋」の小曾根一族は時宗真光寺に葬られており、その過去帳は第二次世界大戦の際に焼失しています。

1600年以前に兵庫の地において小曾根姓がいたかどうか、今回の調査では分かりませんでした。しかし、小曾根家が旧家である捶井家と血縁関係を結べたことを鑑みると、小曾根家もまた捶井家とつりあうほどの家格であっただろうことが窺われます。



時宗真光寺にある「讃岐屋」小曾根家の墓

8. 小曾根伝説：白藤七郎左衛門源ノ朝影の次男・小曾根三郎

小曾根家の先祖は南北朝時代に新田義貞らとともに戦い、後醍醐天皇より小曾根姓を賜ったという伝説があります。小曾根家古文書の伝説では白藤七郎左衛門源ノ朝影が祖先とされ、江戸時代の絵師・国芳が安政元年（1854年）に『英雄大倭十二士 午 新田郎等 白藤彦七郎』と題してその武勇を描いています。小曾根伝説は脚色が入った創作である可能性が高いと思われますが、小曾根の祖先が当時兵庫に実在し、官軍に味方したことまでフィクションであるとは限りません。白藤一族は支流が多く、建武の時代には既に21家あったとされており、その支流が小曾根姓となった可能性も考えられるのです。一方で、赤松啓介著（1980年）『神戸財界開拓者伝』（太陽出版、458頁）には、白藤を姓とする豪商の資料は発見されておらず、遊侠好みの姓なので、恐らく船頭たちの仇名から白藤姓が生まれたものだろうと述べられています。これに則ると、小曾根氏がかつて白藤姓を名乗っていた可能性は低いと考えられます。

9. 橘諸兄の子孫である可能性

江口良橋著（1972年）『神戸史談』（神戸史談会編、9頁）によると“小曾根氏姓は橘”とあります。楠木正成とともに湊川の戦いで戦った軍事官僚に橘正遠という人物がいるように、畿内には橘一族が多く存在しました。楠木家も橘一族と言われています。（なお、『武田氏家臣団人名辞典』（（株）東京堂出版、2015年）を索引しても武田家臣団に橘氏は出てきません。）小曾根家古文書においても、小曾根家は橘諸兄氏と濃厚な関係があると記されており、福厳寺での後醍醐天皇の出迎えも、こうした血縁関係から参加に応じたものと考察できます。官軍に味方し、小曾根緘の鎧甲を着て戦った功績から、小曾根姓と称すようになり、今日に至った可能性があります。

これら9つの可能性が神戸の小曾根一族のルーツとして挙げられます。これらが独立しているわけではなく、複数の事実が重なり合っている可能性もあります。いずれにせよ、家格が突然にして旧家並みに上がることは考えにくく、小曾根家は江戸時代よりも前から兵庫の地に在住していたと思われます。

2020年に発生したコロナ禍により、企業活動が大きく制限される中、せっかくの時間ができたのならばと先祖調べに至った訳ですが、結局のところ釈然としなかったところは筆者の力不足であり、今後の課題といたします。

OZONE historical chart

●17世紀	「讃岐屋」小曽根甚右衛門として兵庫で酒造業を営む	(株)神戸電機製作所設立、小曽根貞松社長就任(1917～1938)	小曽根貞松、(株)篠山製絨所および(株)三重製絨所の取締役就任	1959	昭和 34	小曽根真造、(株)たもん取締役社長就任								
1667	寛文 7	俳書続山井に小曽根道慶と重命の句が掲載される	小曽根貞松、神港汽船(株)取締役就任(1917～1926)			小曽根真造、三木商事(株)取締役就任								
1675	延宝 3	小曽根重命死去	小曽根貞松、日本製鉄(株)取締役就任			小曽根真造、社団法人神戸国際カントリー倶楽部理事就任								
1677	延宝 5	弁財天社前に石燈籠一基を奉献	小曽根貞松、神戸市会議員当選、神戸史参事会員当選	1936	昭和 11	(1959～1975)								
1679	延宝 7	小曽根家が兵庫醸造三大名家に数えられる	1918	大正 7	(株)阪神鐵工所設立、小曽根貞松社長就任(1918～1940)	1960	昭和 35	小曽根真造、小野観光開発(株)監査役就任						
		小曽根道慶死去	小曽根貞松、(株)巴鉄工所相談役就任			1961	昭和 36	小曽根真造、阪神金属化学工業(株)取締役社長就任						
1685	貞享 2	小曽根重次死去	小曽根貞松、朝日海上保険(株)設立に参画	1937	昭和 12	小曽根喜一郎死去、従七位を受章		(1961～1970)						
1704	宝永元年	小曽根正吉は兵庫津岡方名主役を1711年まで務める	1921	大正 10	本小曽根合資会社設立、小曽根貞松代表社員に就任	1940	昭和 15	小曽根真造、神戸信用金庫理事就任						
1715	正徳 5	小曽根正吉死去	小曽根貞松、神戸瓦斯(株)取締役就任			小曽根貞松、(株)阪神鉄工所の会長に就任	1965	昭和 40	多聞商事(株)設立、小曽根真造社長に就任					
1732	享保 17	小曽根重榮死去	1922	大正 11	(株)伊丹製絨所設立、小曽根貞松取締役就任(1922～1941)	小曽根貞松、九州電気軌道(株)取締役就任	1966	昭和 41	小曽根真造、神興不動産株監査役就任					
1779	安永 8	小曽根重基死去	京都火災保険(株)設立、小曽根喜一郎取締役に就任			小曽根貞松、日本鉱産業(株)取締役就任(1940～1947)	1967	昭和 42	小曽根真造、(社)日本舶用工業会副会長に就任					
1798	寛政 10	小曽根隆恒死去	小曽根貞松、朝日海上火災保険(株)取締役就任(1922～1937)			小曽根貞松、神戸生糸(株)の取締役に就任(1940～1941)	1968	昭和 43	小曽根真造、阪神電気鉄道(株)の取締役に就任					
●18世紀後半	「樽屋」小曽根喜一郎として兵庫で酒樽製造業を営む	小曽根貞松、須磨御殿を購入	小曽根貞松、(株)オリエンタルホテルの社長に就任			小曽根真造、神戸生糸(株)取締役就任(1940～1946)		小曽根真造、多聞商事(株)取締役会長就任						
1849	嘉永 2	小曽根宣孝(初代喜一郎)死去	小曽根貞松、社団法人舞子カンツリー倶楽部監事就任			小曽根真造、日本電子工業(株)取締役就任(1940～1947)		小曽根真造、藍綬褒章を受章						
1885	明治 18	小曽根宣豊(二代目喜一郎)死去	1924	大正 13	(株)神戸商業銀行を設立	1941	昭和 16	小曽根真造、(株)明石発動機製作所の取締役に就任						
1892	明治 25	小曽根喜一郎(三代目喜一郎)、神戸報国義会幹事長に就任	神戸生糸(株)設立、小曽根喜一郎取締役就任			(1941～1947)	1943	昭和 18	小曽根真造、(株)明石発動機製作所の取締役に就任					
1894	明治 27	摂津電気鉄道(後の阪神電気鉄道)設立発起	1925	大正 14	小曽根貞松、日本保険共栄(株)取締役就任(1925～1926)	小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)取締役就任		小曽根真造、トキワ合板(株)取締役就任						
1896	明治 29	日本毛織(株)設立、小曽根喜一郎監査役に就任	小曽根貞松、神戸練染工業(株)取締役就任			小曽根貞松、山陽瓦斯(株)相談役就任(1944～1945)	1944	昭和 19	小曽根真造、(株)阪神鐵工所の社長に就任、					
1897	明治 30	湊川改修(株)を設立	小曽根貞松、大日本石鹼(株)(後のベルベット石鹼(株))			小曽根真造、(株)阪神鐵工所の社長に就任、		貞松は相談役就任						
1899	明治 32	阪神電気鉄道創立、小曽根喜一郎取締役就任(1898～1932)	取締役就任			小曽根貞松、大阪ガス(株)の取締役に就任(1945～1947)	1945	昭和 20	小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任(1946～1950)					
1905	明治 38	九州電軌軌道(株)設立、小曽根喜一郎取締役就任	1926	大正 15	(株)オリエンタルホテル設立、小曽根貞松取締役就任	小曽根貞松、神戸タクシー(株)取締役就任(1926～1927)		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任	1946	昭和 21	小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			
		(1905～1931)	小曽根貞松、日本絹布(株)取締役就任(1926～1931)			小曽根貞松、神戸国道自動車(株)取締役就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			
1907	明治 40	帝国水産(株)設立、小曽根喜一郎取締役会長就任	小曽根貞松、神港タクシー(株)取締役就任(1926～1927)	1927	昭和 2	小曽根喜一郎、阪神電気鉄道(株)の社長に就任	1947	昭和 22	小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任		
		播磨船渠(株)設立、小曽根貞松社長就任	小曽根貞松、神戸瓦斯(株)の社長に就任(1927～1945)			小曽根貞松、本小曽根合資会社の代表社員に就任		小曽根真造、(株)阪神鐵工所の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		神戸海上運送火災保険(株)設立、小曽根喜一郎監査役に就任	小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)			小曽根貞松、ベルベット石鹼(株)専務取締役社長就任		小曽根真造、兵庫県舶用内燃機工業界理事長就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		兵庫電気軌道(株)設立、小曽根喜一郎監査役就任	小曽根貞松、大日本石鹼(株)(後のベルベット石鹼(株))			取締役就任		(1947～1950)			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
1909	明治 42	東洋捕鯨(株)設立、小曽根喜一郎取締役就任	1926	大正 15	(株)オリエンタルホテル設立、小曽根貞松取締役就任	小曽根貞松、日本絹布(株)取締役就任(1926～1931)	1945	昭和 20	小曽根貞松、大阪ガス(株)の取締役に就任(1945～1947)			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
1911	明治 44	山陽皮革(株)設立、小曽根貞松取締役就任(1911～1947)	小曽根貞松、神戸練染工業(株)取締役就任			小曽根貞松、ベルベット石鹼(株)専務取締役社長就任	1946	昭和 21	小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任(1946～1950)			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
1912	明治 45	富士身延鉄道(株)設立、小曽根喜一郎監査役就任	小曽根貞松、大日本石鹼(株)(後のベルベット石鹼(株))			取締役就任		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
	(大正元年)	(1912～1936)	1927	昭和 2	(株)オリエンタルホテル設立、小曽根貞松取締役就任	小曽根貞松、日本絹布(株)取締役就任(1926～1931)		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		小曽根貞松、四国瓦斯(株)監査役就任(1912～1913)	小曽根喜一郎、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、神戸タクシー(株)取締役就任(1926～1927)		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		小曽根貞松、身延電燈(株)取締役就任(1912～1913)	小曽根貞松、神戸瓦斯(株)の社長に就任(1927～1945)			小曽根貞松、日本絹布(株)取締役就任(1926～1931)		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		小曽根貞松、明石瓦斯(株)取締役就任(1912～1924)	小曽根貞松、本小曽根合資会社の代表社員に就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)の社長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
1913	大正 2	済生信託(株)(後の神戸弘業(株))設立、小曽根貞松取締役就任(～1932)	小曽根貞松、ベルベット石鹼(株)専務取締役社長就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)	1947	昭和 22	小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
		小曽根貞松、日本毛糸紡績(株)取締役就任(1913～1918)	(1927～1936)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		小曽根貞松、関西瓦斯(株)監査役就任(1913～1918)	1928	昭和 3	小曽根貞松、日本毛織(株)の取締役に就任(1928～1947)	小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)	1947	昭和 22	小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
1914	大正 3	長崎電機軌道(株)設立、小曽根喜一郎役員に就任	小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
		大安生命保険(株)設立	小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
1916	大正 5	小曽根貞松、日本耐火煉瓦(株)取締役就任(1916～1918)	(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)	1950	昭和 25	小曽根貞松、阪神電気鉄道(株)相談役就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
1917	大正 6	第一ラミー紡績(株)設立、小曽根貞松取締役就任	小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)	1951	昭和 26	小曽根貞松死去、従六位勲四等を受章			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任
		(1917～1922)	1929	昭和 4	小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)	小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、財団法人帝国瓦斯協会理事就任			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			(1931～副会長、1937～会長就任)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、昭和毛糸紡績(株)取締役就任(1928～1942)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任			小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に就任		小曽根真造、トキワ合板(株)の社長に就任	
			小曽根貞松、日伯拓殖(株)取締役就任(1928～1947)			小曽根貞松、日本染工(株)取締役就任(1927～1932)		小曽根貞松、(株)大阪野球倶楽部の取締役会長に						

OZONE bibliography list

100年史編集委員会	2018	『阪神内燃機工業百年史 木下鐵工所全史』、阪神内燃機工業(株)
森田康之助	1987	『湊川神社史・下巻(鎮座篇)』、湊川神社社務所
(福)神戸報国義会	1992	『神戸報国義会百年史』、(福)神戸報国義会
(福)神戸光有会	2012	『120年のあゆみ 神戸報国義会から神戸光有会へ』、(福)神戸光有会
財団法人日本経営史研究所	2005	『阪神電気鉄道百年史』、阪神電気鉄道株式会社
神戸瓦斯(株)	1940	『神戸瓦斯四十年史』、神戸瓦斯(株)
(株)播磨造船所	1960	『播磨造船所50年史』、(株)播磨造船所
(株)オリエンタルホテル三十年の歩み編集委員	1956	『オリエンタルホテル三十年の歩み』、(株)オリエンタルホテル
広野ゴルフ倶楽部50年史編集委員会	1982	『五十年のあゆみ』、広野ゴルフ倶楽部
(株)伊丹製絨所	1933	『伊丹製絨所十年史』、(株)伊丹製絨所
江口良橋	1972	『神戸史談 江口良橋特集』、230、神戸史談会
樋上権兵衛	1957	『郷土産業史 会社の歩みと巨人の足あと』、株式時報社
赤松啓介	1980	『神戸財界開拓者伝』、太陽出版
川畑伊太郎	1934	『神港人物太平記』、新人物評論社
兵庫県教育委員会	1967	『郷土百人の先覚者』、兵庫県教育委員会
公評散史	1892	『兵庫県人物評』、神戸同盟出版
館林市教育委員会,館林市立図書館	2001	「館林記;館林騒動記」、『館林双書』、29、館林市教育委員会:館林市立図書館
千鹿野茂	1998	『続家紋でたどるあなたの家系』、(株)続群書類従完成会
日本家系家紋研究所	1991	『小曾根・小曾禰一族』、日本家系協会
小曾根貞松	1903	『海軍大演習観艦式写真帖』、小曾根 貞松
柴辻俊六ほか	2015	『武田氏家臣団人名辞典』、東京堂出版
前田章賀	2012	『明治初期 表碇三十八ヶ町 土地台帳名簿録』
喜多善平	1963	『北風遺事・残燈照古抄』、喜多善平
東京毎日新聞社	1918	『大日本重役大観』、東京毎日新聞社編集部、p341
藤山貌郎	1925	『大阪財閥論』、p162
岡崎真雄	2014	『岡崎家の歴史』、岡崎真雄、p121
今井林太郎	1999	『日本歴史地名体系29 兵庫県の地名I』、平凡社
内田信也	1951	『風雪五十年』、実業之日本社、p27-28
西桂	2013	「旧内田邸(天理教兵神大教会)庭園について」、『歴史と神戸』、296、p29-35
三島康雄	1987	「小曾根財閥は中央財閥か?」、『国民経済雑誌』、156(6)、p25-44、神戸大学経済経営学会
三島康雄	2003	「財閥解体期の小曾根合資会社」、『奈良県立大学研究季報』、14(2・3)、p27-38、奈良県立大学
寺内直子	2015	「名古屋における雅楽伝承の一断面:幕末から明治へ」、『日本文化論年報』、18、p17-53、 神戸大学国際文化学研究科日本学コース
曲田浩和	2012	「名古屋油商吉田家の資料について」、『愛知県史研究』、16、p99-112、愛知県
柴孝夫	1980	「金融恐慌時における経営戦略の破綻とその整理 川崎造船所の場合」、『経営史学』15(1)、p28-53、 経営史学会
神野雄二	2006	「日本印人研究:小曾根乾堂の生涯とその系譜」、『熊本大学教育学部紀要 人文科学』、55、p231-240、 熊本大学教育学部
加藤慶一郎	2013	「20世紀初頭における神戸市域の第一次産業 近郊農業と遠洋漁業を中心に」、『流通科学大学論文集 経済・情報・政策編』、22(1)、p133-156
本間雄治	2015	『佐賀財閥と呼ばれた実業家 伊丹弥太郎と伊丹文右衛門』
河野昭三	2010	「社会・企業(組織)・個人の統合に向けて マズローZ理論の意義」、『経営学の伝統と革新』、 甲南大学経営学会編

神戸又新日報	1926.4.27	「[十万預金者を泣かせた岸本銀行の背任公判]
神戸又新日報	1896.9.1	「神戸市目下の急務」
日刊工業新聞	1971.11.5	「私のサラリーマン時代 上」
日刊工業新聞	1971.11.12	「私のサラリーマン時代 下」
神戸新聞	1952.9.11	「船成金の夢はかなし 四千万円で天理教が買収」
新愛知新聞	1919.8.26 ~ 1919.8.28	「富山県工業界(上~下)戦後事業界の近況
福祉新聞	2018.2.16 / 2018.2.22 / 2018.3.01	「社会福祉法人風土記<33>神戸光有会 上、中、下」
神戸ロータリークラブ	http://www.koberotary.com/welcome.html	
兵庫県 「湊川改修の経緯」	https://web.pref.hyogo.lg.jp/kok11/ko05_1_000000019.html	



オゾネ百年記念誌

発行日 2021年3月19日 非売品

著者 小曾根 知晃

発行 株式会社オゾネ
〒650-0027
神戸市中央区中町通3丁目
2番15号

デザイン企画 株式会社ジャム・デザイン
